宮島の歴史と民俗

HISTORY AND FOLKLORE OF MIYAJIMA

NO. 1

1982

宮島町立宮島歴史民俗資料館

MIYAJIMA HISTORICAL AND FOLKLORE MUSEUM

目　　次

○はじめに…… 1

○町(まち)のなりたち―宮島調査覚書―……堤　正信…… 2

○資料紹介―宮島芝居関係資料(1)―……高橋修三…… 8

○資料館の活動……34

1. 入館者数……34
2. 年度別予算一覧……36
3. 資料収集……37
4. 調査・研究……41
5. 展示・普及……45
6. 資料館協議会……46
7. 購入図書，受贈・交換図書……48

○町史編さん室の活動……54

1. はじめに……54
2. 経過報告……54
3. 調査実施作業……58
4. 町史編さんの機能図……60
5. 条例……60
6. 編さん委員会……62

○編集後記……63

はじめに

資料館は、昭和49年４月に開館して以来８年を経過しました。この間地道ではありますが活動を進め、その成果を年報 No. 1・No. 2・No. 3 として刊行してきました。これも町民の方々をはじめ，関係者各位のご支援ご協力のたまものと感謝しております。

一方、資料館協議会委員や町民の方々の中からはこれを基盤として、より積極的に資料を収集し、町史として刊行しようという気運が高まりました。それを受けて、昭和55年４月には教育委員会に町史編さん室が設置され、職員２名が配属、昭和56年には資料館の職員１名が同室に転属されました。

宮島にかかわる資料を広範囲に収集し、調査・研究を進めながらさまざまな場を通して活用し、これを永く後世に伝えていくためには、資料館・町史編さん室をはじめ各分野の連携が必要となります。

この年報の編集も、今回からは資料館と町史編さん室との共同で行うことにしました。「宮島の歴史と民俗」に改題し、従来よりは内容を幾分か幅広くしております。今後は改善を加え、より豊かなものにしたいと考えております。また、資料館・編さん室の関係者のみならず、宮島に関心をおもちの方々、或いは、資料館・編さん室の活動のあり方などに対してご意見をおもちの方々からも広く稿を寄せていただければ幸いに思います。

資料館や社会教育関係、更には、文化活動全般をとりまく昨今の状況には厳しいものがあります。資料館についていえば、人員の増員・施設の拡充を容易に行なえない、というのが一般の現状かと思われます。宮島の場合も、多かれ少かれ同様な問題が生じております。

しかし、こうした状況下にあればこそ、私共の活動の真価が問われているともいえます。ささやかではあっても歩みを進め、宮島なりの町史・資料館のあり方を求めていきたいと考えております。

何卒、皆様方の旧来に倍するご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。

なお、今回は、長年、宮島に関心をもっておられる広島女子大学助教授堤正信氏に寄稿していただくことができました。誌上を借りて厚くお礼を申し上げます。

町(まち)のなりたち—宮島調査覚書—

広島女子大学助教授
堤　　正　信

はじめに

瀬戸内に住む研究者にとって、宮島はヒロシマと並ぶ貴重な素材である。そこには多種多様なアプローチから豊富な成果を導き出す可能性が秘められている。ここでは集落地理学の立場から、宮島をこんな風に調査してみてはどうか、という、筆者の個人的なメモを記しておきたい。いいかえれば、今、疑問に思っている点、知りたい点を述べて、これからの調査に備えることでもある。

従来、筆者の関心は都市と農山漁村からなる「地域」にあり、地域に骨格を与える役割が、中心地としての都市であると考えてきた。一方、農山漁村は、首都・県都から役場集落に到るまでの中心地のネットワークを利用して、自らの生きのびる方途を探ってきた。そうして、両者が共存できれば地域は安定するが、そういう事例は必ずしも多くないと考えられる。地域が都市中心に強引に再編成されつつあるというのが日本の近代でもあろう。そこにみられる都鄙関係を軸に、地域の近代を描写したい、というのが筆者の希望である。

宮島は島(しま)ではあるが、あるいはそれゆえに、周囲から孤立して自給自足できる地域では全くない。住民のほとんどは木工などの地場産業や観光などのサービス業に従事して生計を立ててきた。その意味で、典型的な「都市」である。こうした性格は、おそらく町の形成以来不変であったと思われる。したがって、宮島の歴史は都市史として解明されなければならない。その都市史は、以下の諸点から考察できるのではあるまいか。

1. 絵図・地図からみた宮島

門前町・港町としての宮島の歴史は海浜にとりつくことによって始まった。その市街地は定住者の増加とともに拡大した。その事実をもっとも明確に伝える資料が絵図や地図である。

これまでの研究によると、鎌倉時代頃まで平常は無人の島であったが、修験・聖ら行者を先達として、やがて神事関係者が南北朝頃までに島に移り住んだとされる。そして博多や堺などの商人たちも参集して市立が行われた。商人が集住し、今日の市街地を形成するためには地形の改変—海岸の埋立が必要であった。換言すれば海岸線の変化であるが、それは絵図の記載内容を現在の測量図上に復元することによって明確となる。

市街地を復元しうる最も古い絵図は、松本山雪筆「宮嶋図屏風」(東京国立博物館蔵、『諸国風俗図屏風』毎日新聞社、所収)であり、小松茂美氏の考証によれば、寛文期(1661—73)の作品とされる。また、享保16年(1731)には「安芸国厳島勝景図」(宮島歴史民俗資料館蔵)が刊行されている〔そこに記された貝原益軒の文章は元禄2年(1689)〕。

これらは鳥瞰図であり、町並を全体として把握するには貴重な資料であり、徹底的な活用がはかられなければならないが、土地割まではわからない。町割を示す図面は宮島に2点現存する。1つは大願寺蔵の「厳島全島絵図」であり、元禄14年(1701)に作製されたようである。この図の中に、家並が描かれている。もう1つは吉田家蔵の「厳島町絵図」であり、天明3年(1783)と記されている。これは屋敷の測量を基礎に製図され、絵図というよりは地図的であり、精度も高い。大願寺絵図では海岸のままであった中小浦が、この図では埋立られ、社倉が設置されていることなど、表現された内容の比較も必要な作業である。

これらの町絵図から、当時の町並を構成する商人やその業種、あるいは借家など、町の景観を復元することができる。また、これらを明治維新後の地租改正事業によって作成された公図(字図)などとつきあわせたり、現地比定することによって、多くの情報が引き出せる。たとえば、絵図中の藪地が、その後いかなる地目に転換されたか、境内地はどうなったか、また、宅地の分筆や合筆の経過、土地所有(者)の変遷などが検討されなければならない。とりわけ宮島の場合、戦災も受けず、現在の市街が近世都市の延長線上に位置しているため、現景観からさかのぼる、という手法はきわめて有効であると考えられる。

その他に「芸藩通志」附図や「厳島図会」をはじめ、刊行された多くの絵図・地図の活用が必要である。また、近代以降になると、宮島の簡単な市街図が広島のそれにあわせて掲載されているケースが多く、それらも丹念に収集されなければならない。たとえば、明治11年(1878)桑原信編輯「広島県管内全図」(広島県史編さん室蔵)には,名邑市街縮図として尾道・吉田・府中・御手洗・東城・鞆津・福山・西城・三次・三原・広島とともに厳島市街の略図が掲載されている。そこでは、現在の土産物屋の通りから海岸にかけて、かなりの空地が残されている。近代になれば「土地台帳」その他の課税・行政資料が利用できるので、地図の分析も一段と詳細にできよう。また、何よりも有力な地図として、3000分1都市計画図など大縮尺地図が存在する。

このような絵図・地図の活用による景観分析はこれまでの宮島調査ではなされておらず、今後のテーマの1つと考えられる。なお、大願寺絵図と吉田家絵図は、宮島町史編さん室の全面的な協力のもとに、筆者がトレースし、町史編さん室に保管されている。

2. 生態学的にみた町(まち)と村(むら)—食べものと下肥

町が自給自足の単位ではありえない以上、食べものはどこからか調達されなくてはならない。宮島の場合、島内でどの程度、食糧が確保できたのであろうか。島のあちこちに開墾の跡が認められるが、それらはいつ頃、誰によって、どの程度まで開田されたか、そしていつ頃消滅したのか、ということがまず、明らかにされる必要がある。近代については「旧土地台帳」(法務局蔵)が有力な手掛りを提供するにちがいない。

さて、島内のわずかな開墾地ではとうてい町の人口を養なうことはできなかった。さらに、宮島が門前町ないし広島の奥座敷となると、料亭などで消費される魚介類などの食料品も相当な量にのぼったであろう。必要な鮮魚や野菜などはいったいどこから仕入れられていたのであろうか。生鮮食料品の流通は局地的な取引圏をなしていたと考えられ、その具体的な復元が課題となる。とりわ

け、内陸都市のような同心円構造とは異質な取引圏の存在も予想され、そこに内海地域の特質がみられるかもしれない。

木工品の全国的流通や日本三景への遠隔地からの参詣者によって宮島の町がなりたってきたことは事実であろうが、また一面、日常的に宮島を支えてきた、近隣の村々の存在も見落してはなるまい。

1971年の「厳島民俗資料緊急調査」によってその一端が明らかにされたが、かつて大野と宮島は食べものと下肥を媒介として不即不離の関係にあった。節季に「帳場」が立てられ、翌年の1人当り下肥の代価を決めていたという。下肥のお礼に米や野菜を提供していた。「五升尻(じり)」という言葉もこのようにして生れたようである。これらの実態を克明に聴きとって、宮島の人々が日常的に生活していくためには、周辺の地域がいかなる役割を果していたか、を明らかにしなくてはならない。中心地としての都市の本質はそこにあらわれているはずである。

都市の排泄物が廃棄されることなく、周辺農村における土地利用の高率化に寄与していたことは、すでによく知られている。中国の都市を空からみると、緑のオアシスにみえるという。都市のまわりを緑の同心円がとりまき、その緑はやがて褐色の平原の中に消えていく。そのオアシス的景観は、都市から1日の行程で運ばれる下肥を利用した近郊農業—都市向け蔬菜栽培によって生み出されたものといわれる（Yi-Fu Tuan, *China*, 1970）。宮島の場合、輸送手段が船であることから、それに由来する特徴も考えられる。

関西の中心地大阪については、大阪府経済部農務課によって『大阪平野に於ける屎尿利用の変遷』(1949）としてまとめられた。これは「大阪平野のノツボに就いての歴史地理学的研究」（著者野村　豊氏の言葉）である。近世の屎尿資料は『大阪市史』から抜粋して、47頁にわたって収録されている。百姓と町人およびその仲介者との間で様々な紛争が生じた結果、町奉行所に多くの史料が残された。それほど重要な問題であったのである。明治初年の下屎代は1カ年1人当り白糯7升、小便代が白糯3升、さらに茎菜・茄子等がつけ加えられたという。ところが、都市への人口集中、したがって屎尿の排泄量の急増をみた大正期の欧州大戦を画期として、それまで農民によって我勝ちにと汲取られた屎尿も、有価物から無料に、さらには農民に汲取ってもらうためには料金を支払わなくてはならない時代となった。

ともかく、このような視角から、都市と農村との生態学的関係を明らかにすれば、宮島を単なる点としてではなく、地域に支えられた都市として浮びあがらせることが可能になるのではあるまいか。

3. 集住と文化

海岸の若干の埋立によっても、山を背に民家がひしめく密居状態は変りようがなかった。この限られた空間のなかで、日常的な暮しのいとなみと年間を通しての多くの祭礼、それに伴なう大量の参拝者の受け入れがなされてきた。集落を構成する個々の場所はそれぞれに意味づけられ、無駄なく活用されている。そこに住民の生き生きとした文化をみてとることができる。

集落といえば、一般的に散居と密居に二大別できる。前者は中国山地によくみられる形態であ

り、1軒1軒の農家が山を背に、小平坦地を前にして立地する。家を単位としてひとまとまりの土地を経営する、という思想に貫かれている。この散居形態は、瀬戸内沿岸・島しょ部においても、アゲとかオカとか呼ばれる、海岸からやや離れた緩斜面を利用して農耕を営む部分でみられる。これに対して海浜に立地し、漁業や海運業などを生業としてきたハマの集落は密居形態をとり、瀬戸内にひろく分布する。そのなかには周辺地域の経済的社会的な中心地となってきた集落も多い。宮島も基本的にはこうしたものの1つとみなせよう。さらに、宮島は架橋による自動車文明の侵入からもまぬかれており、集落のなかに伝統的な瀬戸内海文化の息吹を感じとることができる。

多くの人間が集まって住まう場合、空間の私有化には一定の限界があり、むしろその共同化が主要な基調となる。宮島のように外来者の短期流出入の激しく、またそれを存立基盤とする町では、まず、外来者の空間と住民の空間とが分化せざるをえない。外来者の入りにくい空間をどこかに確保しなければ、落ちついた暮しはできないのである。

外来者は広い通りに導かれ、ひしめく土産物店に眼を奪われているうちに、狭くて暗い路地への入口は知らない間に通りすぎてしまう。実はその路地にこそ、住民の日常的な世界—宮島の素顔がかいまみえるのである。したがってまず、大から小まですべての街路がいかなる機能を果しているかを調査しなくてはならない。それには交通量から利用者の特性、さらには道沿いのちょっとした盆栽などに至るまでの、細かな観察が必要となろう。

つぎに、住民によって空間がいかに共同化されているか、あるいはいたか、について考えてみたい。その典型はおそらく井戸端であろう。そもそも町の成立には井戸の掘削が必要条件であったが、それらはいかに利用され維持されてきたのであろうか。水道が各戸に普及する以前の状態について、その利用圏や井戸を核とする社会集団の確認が必要な作業となろう。町社会が存続するためには、強靱かつ柔軟な住民組織が不可欠であり、井戸端の問題はその社会関係を解明する糸口ともなりうる。冠婚葬祭とのからみあいもあろう。また、火災に弱い木造密集市街地であり、過去に大火や水害を経験してきた宮島においては、防災組織の問題とも関係するかもしれない。なお、井戸端のような空間は、単に水くみだけでなく、様々なコミュニケーションの場として、多様な利用がなされてきたはずである。1つの空間が多様な意義をもつことも注目すべき現象であり、そのことによって、空間が限定されていることにもかかわらず、豊かな生活が保証されえたのではあるまいか。

一方、家庭生活の持続のためにはプライベートな空間が確保されなければならない。限られたスペースのなかでいかにプライバシーを守るかという工夫もまた、観察点に加えられる。3〜4世代居住がどこまで可能であったか、あるいはまた、その条件はどのようなものであったか、といった疑問もわいてくる。

銭湯なぞ、京都のような戦前のままの暮しの定着した町では衰えるきざしすらないが、広島のように郊外居住が主流となりつつある都市では廃業があいついでいる。家庭風呂のスペースを共同化することによってプライベートな空間を豊かにするのも1つの考え方であり、宮島においてもその種の工夫がみられるにちがいない。

密居の1つの特徴は家庭菜園など「緑」と親しむ空間を確保しにくい点にある。その結果、植木

鉢やプランターが屋根の上にまではいあがることになる。これもまた、宮島らしい景観であるが、単に宮島の特殊例ではなく、密居への対応の一例として、都市一般に敷衍することができる。たとえば、密集市街地として知られる広島市段原地区では、たまたま再開発用地という空地が、一時的に町中におびただしく出現した。この空地がまたたく間に細分化され、多くの住民の家庭菜園として、青々と繁っている。段原でなくても、鉄道沿線の空地や河岸など、ちょっとした空地がすべて園地（Garten）化しつつあるというのが、この数年来のできごとである。さらに、高層住宅として知られる基町においても、十数階の鉄筋アパートの屋上に土が運びこまれ、四季を告げる「高原」植物が育てられている。このような「緑」や「土」への潜在的な欲求が、機会さえあれば噴出するというのも、密居―都市の一面であろう。それはまた、結果的にしろ、道行く人の眼をも楽しませてくれる、共同性を兼備した空間を現出させている。

海浜のわずかな平地に密集して住まうとはいえ、土地の圧倒的な不足はまぬかれない。そのため、住宅はおのずから背後の斜面をのぼらざるをえない。このことも尾道や呉あるいは神戸などと共通する港町の特徴といえるかもしれない。そして、やむを得ず斜面にはいあがるだけではなく、そのことによって豊かな景観を手に入れることもできるのである。集住していても眺望さえ良ければ、ハレバレと毎日を過すことができるわけであり、こうした側面もまたみのがすことはできない。

瀬戸内の、ある密居集落に住む中年の婦人が中国山地を旅行した際、毎日のおかずが隣近所に知れわたる自分の生活と比べ、山の中に家がポツンポツンとあるこの辺りではいかに呑気に暮らせることか、と思ったそうである。密居の長所と短所、さらにその短所を補うさまざまな工夫を宮島において明らかにしていけば、その成果は瀬戸内のハマの集落一般に敷衍できると考えられる。

4. 町のにない手

村落の場合、耕作する農民が地域のにない手であり、彼らは基本的に先祖代々、同じ村に住みつづけると一応考えられるが、都市である宮島の場合はどうであろうか。

まず注目されることは、前回の民俗調査からその一端が知られたように、住民の流動性の高さである。たとえば、吉田家絵図に記載された商家のうち何パーセントが果して現存しているのか、あるいは宮島を本籍地とする住民はどのくらいを占めているのか、といったことが疑問となる。また、流動性が高いとすれば、その前住地や転出先なども気になることである。

瀬戸内の近代における人口移動の基軸は北九州と大阪であると考えられるが、宮島の実態はどうか、中国山地との人的交流や広島をはじめ都市間流動がどの程度みられるか、といった人口移動の地域性が解明されなければならない。そのような作業によって、宮島の全体社会における位置づけが可能となるにちがいない。

さて、視点を宮島に定めると、流動する人々はこの町でいかなる役割を果してきたか、ということが次に問題となろう。

また、短期流動者を受けいれる器が、おそらく借家であったと思われる。近代宮島における借家は、農村の水田にも匹敵する投資対象ではなかったかと考えられる。そしてまた、借家は町の景観を構成する主要な要素でもある。この借家の分布・年代・内部空間のあり方なども興味深い。棟割

長屋の絵図は奈良盆地の寺内町をとりあげた『今井町絵図集成』（森本育寛編）に収録されているし、東京の下町の住宅については『東京の町を読む　下谷・根岸の歴史的生活環境』（東京のまち研究会、相模選書、1981年）に詳述されている。これらに宮島の事例がつけ加えられれば、住宅史や都市史への寄与ともなろう。

宮島の町の基盤はシャモジを代表とする木工細工にあり、そこにみられる問屋と職人の関係が大家と店子にどの程度対応するのか、といった問題も重要である。

古代・中世以来の宗教・文化が、ほぼ固定された空間を仮の宿りとする、流動する人々によって連綿と継承されたとすれば、これほど奇妙なことはあるまい。それが可能となってきた秘密をときあかすことこそ、宮島調査の眼目ではあるまいか。

以上、思いつくままに筆者の考えを述べてきた。見当はずれも多いとおそれるが、今後の本格的な調査にあたって、読者諸氏のご教示を賜れば幸いである。

資料紹介—宮島芝居関係資料(1)—

宮島歴史民俗資料館学芸員
高　橋　修　三

近世の宮島は、厳島神社の鎮座地、瀬戸内海における交通・商業の要衝として、更には観光・歓楽の町として宗教的な、他面においては現世的・開放的な側面とを合わせもちながら繁栄していく。

中世以来、神社で催される祭礼（法会）や、それに伴う四季の市立（冬の市は近世後期にはすたれている）には、各地から様々な人々が参集している。そして、この市立の際には人々を誘致するために、藩の許可の下に富くじ入札（享保頃には有名になっている）や浄瑠璃・歌舞伎などの芝居興行が為されている。また、寛永年間には広島城下から傾城町が宮島に移されてもいる。

これらが要因となり、宮島は経済的に発展したのみならず文化的にも高まり、次第にその名を全国に広めてゆくことになる。

その状況を物語る資料として、資料館には3葉の見立番付がある。見立番付は、相撲の番付に倣って、あらゆる事物をランキングし配列して評判しあいながら楽しむというもので、その内容の正確さについては自ずと限度があるが、大凡その状況はうかがえると思われる。

その1は、寛政10年（1798）に京都で板行された「大日本神社仏閣参詣数望」(注1)で、ここでは東方前頭2枚目（西方2枚目は山城・八幡宮）に位置づけられている。

その2は、文化12年（1815）に大坂で板行された「日本名所旧跡行脚数望」(注2)で、西方小結に（東方は出羽・象潟）。

その3は、文政8年（1825）に大坂で板行された「諸国芝居繁栄数望」(注3)で東方前頭5枚目に位しており、西方5枚目は、長州の萩、宮島と同様西国において著名な讃岐の金毘羅市は東方6枚目である。

以上、近世の宮島の性格について若干述べたわけであるが、本稿では、文政年間に東方前頭5枚目に位置づけられた宮島の芝居に関する資料を紹介してみたい。

宮島の芝居については、薄田太郎・薄田純一郎著『宮島歌舞伎年代記』（昭和50年、国書刊行会刊）及び、同書に寄せられた角田一郎「宮島の芝居小屋」によって、その全容を知ることができる。

それによれば、宮島の歌舞伎・浄瑠璃等の芝居は、先にも述べたように市立の際の人寄せのために、富くじ入札と深いかかわりをもちながら、広島藩の後援の下に上方や江戸から役者が招かれる（役者にとっては奉納興行）という請芝居の形態であった。殊に、夏6月市には、東西の代表的な名優が来演している。

同書には、宮島の芝居の始源から終末に至る（寛文年間～明治中期）豊富な資料が掲載されており、その中には資料館で所蔵している資料も含まれている。

そこで、今回は、その中から歌舞伎に関する資料、とりわけ番付を紹介する。既に、薄田氏『年

代記』に掲げられているものが殆んどであるが、同書刊行後資料館が収集した資料を若干加えて一覧表を作成した。番付以外の歌舞伎に関する資料、及び歌舞伎以外の芝居関係資料等については、次回で紹介する予定である。

ここで表の記載要領について説明しておきたい。ただし、薄田氏『年代記』のそれをほぼ踏襲していることをお断りしておく。

○年号年干支月

（ ）を付したものは、番付に年号等が、印刷されていたもの（手書きの場合も含む）で、推定によったもの。

○番付種別

『演劇大百科大事典』等の分類と若干異なるが、薄田氏のそれを採用した。

○外　題

番付に記されている通りを掲げた。

○役者名

原則として、立役・若女形から各1名を掲げた。また、同一年月で同一種の番付が2葉以上ある場合は、主な役者を番付面の位置等から適宜選択した。

○備　考

欄外に記されている字句、版元等を掲げた。また、注を付したものは、薄田氏『年代記』に掲載されていないもので、図版とともにその全容を紹介した。複製とあるのは、東京都在住の山下中氏（宮島奉行山下平八郎の曾孫）所蔵の番付の複製である。

なお、番付は全て木版一枚摺りである。

浅学を顧みず、また、忽卒に作成したため誤りが多々あろうかと思われる。薄田氏『年代記』についても理解の誤りをおそれている。薄田氏の学恩に感謝するとともに、御叱正をお願いする次第である。

年号年干支月	番付種別	外　題	座　本	役　者	狂言作者	頭取・太夫元	備　考
(文化3丙寅)年	触込		芳沢みなと（カ）	三桝大五郎 片岡松江	並木喜多助	坂東辰右衛門	「文化3丙寅年」の墨書
(文化4丁)卯年6月	触込		中村富之助	柳山四郎太郎 中山大吉	市岡利兵衛	姉川虎蔵	「文化4丁卯とし」の墨書、末吉板(注4)
文化6己巳年6月	触込		叶　梅太郎	谷村民之助 中山氏之助	並木常助	吉野屋巳之助	(注5)
(文化10癸)酉年6月	触込		尾上徳治郎	嵐　松之助 山下秀治郎	奈河政助	中村三津蔵	裏面に「多ばり」の墨書(注6)
(文化11甲)戌年6月	触込		中山源之助	中山来太郎 佐野川花妻	並木兵蔵	尾上七三郎	「文化12」の墨書(注7)
(文化13丙子)年6月	触込		嵐　重治郎	藤川藤蔵 芳沢小紫	井坂兵吉	松島万五郎	「文化13丙子」の墨書、末吉板(注8)(注9)

年号年干支月	番付種別	外題	座本	役者	狂言作者	頭取・太夫元	備考
(文化14丁)丑年6月	触込		芳沢勲次郎	三桝他人 嵐福松	奈河鶴助	小倉山仙助	「文化14」の墨書(注10)
(文政2己)卯年6月	役割	佐野船橋 紙屋次兵衛	尾上鯉三郎	中村冠三郎 嵐福松	奈河繁蔵	尾上初次郎	
(文政3庚)辰年6月	触込		中村吉三郎	市川団蔵 嵐富三郎	奈河勘助	坂東国右衛門	(注11)
(文政3庚)辰年6月	役割	妹背山	〃	中山紋十郎 三桝大五郎	〃	〃	
(文政3庚)辰年6月	〃	義経千本桜	〃	市川虎蔵 坂東卯之助	〃	〃	
(文政3庚)辰年6月	〃	おそめ久松 あこやことせめ	〃	中村熊五郎 佐野川花妻	〃	〃	「文政3の夏」の墨書
(文政3庚)辰年6月	〃	源平布引滝 戻りかご	〃	中山他之助 萩野錦子	〃	〃	「文政3」の墨書
(文政3庚)辰年6月	〃	信仰記 睦玉川	中村市蔵	藤川半治郎 中村市蔵	並木八七	江戸谷久平	「文政3年」「宮島ニテ」の墨書
(文政4辛)巳年6月	役割	すかはら 大津みやげ	片岡熊三郎	嵐三津五郎 片岡あやめ	並木清造	坂東国右衛門	
(文政5壬)午年6月	触込		浅尾亀蔵	市川鰕十郎 沢村国太郎	一色応助	坂東国右衛門	「文政5」「いわ久」の墨書
(文政6癸)未年6月	触込		中村梅吉	小川吉太郎 嵐富美三郎	奈河十四助	萩野大蔵	「文政6」、裏面(注12)に「いわ国屋久蔵」の墨書
(文政7甲)申年6月	触込		中村梅吉	坂東重太郎 藤川友吉	近松慈助	萩野大蔵	「文政7」「いわ久」(注13)の墨書
(文政7甲)申年6月	役割	八重霞浪花浜萩 関取千両幟	〃	中山一蝶 市川市鶴	〃	〃	
(文政7甲)申年6月	〃	一谷嫩軍記	〃	坂東菊太郎 市川三河之助	〃	〃	
(文政7甲)申年6月	〃	鎌倉三代記	〃	中山来太郎 中山豊松	〃	〃	
(文政7甲)申年6月	〃	式三番 一谷嫩軍記 舞扇南柯話	〃	中村仲市 坂東福松	〃	〃	
(文政9丙)戌年6月	触込		中村梅吉	中村芝翫 中村歌六	奈河亀助	萩野大蔵	「文政9」の墨書「のてん」の捺印
(文政9丙)戌年6月	役割	義経千本桜	〃	中村玉之助 浅尾奥山	〃	〃	「文政9丙戌年」「外ニ夏祭浪花鑑外ニわんきう」の墨書
(文政9丙)戌年6月	〃	夏祭浪花鑑	〃	市川甚之助 市川三河之助	〃	〃	「文政9丙戌年」の墨書

年号年干支月	番付種別	外題	座本	役者	狂言作者	頭取・太夫元	備考
(文政9丙)戌年6月	役割	一谷嫩軍記	中村梅吉	市川滝之助 尾上柳枝	奈河亀助	萩野大蔵	「文政9丙戌年」「外ニ妹背山ニ七化中村芝翫相勤」の墨書
(文政9丙)戌年6月	〃	忠臣かうしゃく 浦島太郎	〃	坂東大三郎 中村琴糸	〃	〃	「文政9丙戌年」「いよや」の墨書
(文政11戊)子年6月	触込		中村梅吉	浅尾額十郎 中村松江	金沢金助	萩野大蔵	「文政11」の墨書
(文政11戊)子年6月	役割	源平布引滝 あこや琴せめ	〃	中山新九郎 市川滝十郎	〃	〃	
(文政11戊)子年6月	〃	恋飛脚大和往来 義臣伝	〃	中村京十郎 嵐三勝	〃	〃	「文政11年」の墨書
(文政12己)丑年6月	役割	源平布引滝 夕きり伊左衛門	中村梅吉	市川団蔵 嵐富三郎	近松熊蔵	萩野大蔵	「干時文政12稔」「6月26日夜」の墨書
(文政12己)丑年6月	〃	かるかや	〃	尾上芙雀 嵐団八	〃	〃	「干時文政12歳」「6月27日昼」の墨書
(文政13庚)寅年6月	役割	らん平物くるい 三島おせん 夕きり	中村梅吉	中村歌右衛門 中村松江	金沢金助	萩野大蔵	「文政13庚寅歳」「6月27日昼」の墨書
(文政13庚)寅年6月	〃	一の谷	〃	中山新九郎 片岡松右衛門	〃	〃	「文政13庚寅年」「6月27日夜」の墨書
(文政13庚)寅年6月	〃	姫小松 三島お仙	〃	市川鰕十郎 片岡花蝶	〃	〃	「文政13庚寅年」「7月2日昼」の墨書
(文政13庚)寅年6月	〃	信長記	〃	中村梅助 中村備ゆり	〃	〃	「文政13庚寅年」「7月3日昼」の墨書
(文政13庚)寅年6月	〃	梅の由兵衛	〃	中村半治 中村三光	〃	〃	「干時文政13庚寅年」「中島□□」の墨書
(文政13庚)寅年6月	〃	姫小松 布引滝	〃	市川滝四郎 中村松三郎	〃	〃	「文政13庚寅年」「中島□」の墨書
(天保3壬)辰年6月	役割	忠臣講釈 代々神楽	中村梅吉	嵐三津五郎 中山南枝	金沢金平	片岡清蔵	「天保3壬辰6月23日昼」の墨書
(天保6乙)未年6月	触込		中村梅吉	市川海老蔵 嵐璃光	朝田弥作	片岡清蔵	
(天保6乙)未年6月	役割	森下蔭硲合戦	〃	小川吉太郎 浅尾与六	〃	〃	「天保6年」「6月17日昼」の墨書
(天保7丙)申年6月	役割	いせ物語	中村梅吉	嵐璃寛 中村歌六	奈河政橋	萩野大蔵	

年号年干支月	番付種別	外題	座本	役者	狂言作者	頭取・太夫元	備考
(天保8丁)酉年6月	触込		中村梅吉	市川滝十郎 嵐三勝	奈河繁蔵	萩野大蔵	「文政8」「岩久」の墨書 (注14)
(天保10己)亥年9月	触込		中村梅吉	中村辰蔵 尾上柳子	金沢笑鬼	中山小丈亀	
(天保11庚)子年6月	役割	千代萩	中村梅吉	叶雛助 実川勇次郎	奈河七三助	片岡清蔵	「天保11年子6月13日顔見世」の墨書、浪花和田正板 (注15)
(天保11庚)子年6月	〃	源平布引滝 女鉢木	〃	中村鹿之助 中村団九郎	〃	〃	「天保11年子6月25日昼」「宿 徳田善助」の墨書、浪花和田正板
(天保11庚)子年6月	〃	鬼一法がん三略巻	〃	尾上多磨蔵 嵐亀五郎	〃	〃	「天保11年子6月25日夜」「宿 徳田善助」の墨書、浪花和田正板
(天保12辛)丑年6月	触込		中村梅吉	尾上菊五郎 藤川花友	並木五瓶	萩野大蔵	二ツ井戸わた正板、「金十」の捺印、欄外に尾上菊五郎の口上
(天保12辛)丑年6月	役割	帯文菊振袖 おはん長右衛門	〃	三桝他人 中村芝蔵	〃	〃	
(天保12辛)丑年6月	〃	菅原伝授手習鑑	〃	尾上松助 尾上菊三郎	〃	〃	
(弘化3丙)午年6月	役割	一の谷	中村梅吉	嵐三幸 中村松江	奈河七三助	萩野大蔵	浪花和田正板
(弘化4丁未)年(6)月	触込		中村梅吉	市川団三郎 中村歌南女	奈河久助	萩野大蔵	「くさ諸国御宿仕候 芸州宮島五重塔脇大町、坂田屋文右衛門」の捺印
(嘉永5壬子)年(6)月	役割	梅のよし兵衛	中村梅吉	中村梅若 瀬川路之助	木場延助	中村慶蔵	「嘉永5年子6月宮島」の墨書
(嘉永5壬子)年(6)月	〃	絵本太功記	〃	浅尾為十郎 中山一徳	〃	〃	「嘉永5年子6月宮島」の墨書
(嘉永6癸)丑年6月	役割	太功記	浅井房之助	市川海老蔵 山下金作	近松久間造	槌谷多賀蔵	「嘉永6丑年」の墨書
(嘉永6癸)丑年6月	役割	菅原	〃	市川団蔵 中山文五郎	〃	〃	「嘉永6丑年」の墨書
(嘉永6癸)丑年6月	〃	白石噺 扇屋熊谷	〃	尾上松緑 中村大吉	〃	〃	「嘉永6丑年」の墨書
(嘉永6癸)丑年6月	〃	梅かわ忠兵衛 ひら井ごん八 布ひきのたき	〃	市川森之助 浅尾為十郎	〃	〃	「嘉永6丑年」の墨書

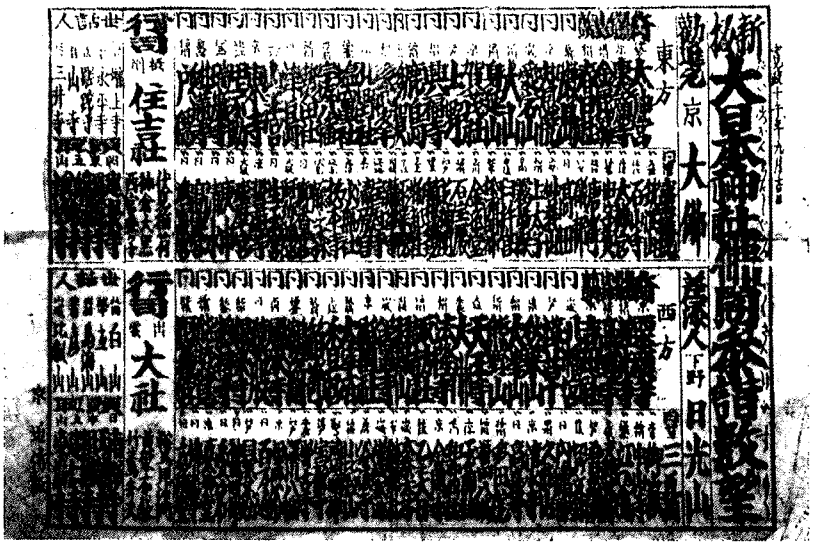
年号年干支月	番付種別	外題	座本	役者	狂言作者	頭取・太夫元	備考
(安政元甲)寅年6月	触込		中村駒之助	市川鰕十郎 藤川友吉	並木正七	播磨屋熊治郎	「御宿（金)屋十助」の墨書、欄外に関三十郎口上
(安政元甲)寅年6月	役割	鎌倉三代記 夕きり	〃	尾上多見蔵 市川新車	奈河七三助	市川団六	浪花和田正板
(安政元甲)寅年6月	〃	源平布引のたき 蘭平物くるひ	〃	中村翫雀 中村雀右衛門	〃	〃	浪花和田正板
(安政元甲)寅年6月	〃	太功記 お染久松 なると 夕きり	〃	沢村源之助 嵐璃登	〃	〃	浪花和田正板
(安政2乙卯)年6月	役割	芦屋道まん	中村照七	嵐冠十郎 沢村甚容	横琴八十助	中村梅吉	「安政2年卯6月28日昼」の墨書、浪花和田正板
(安政2乙卯)年6月	〃	朝顔日記	〃	浅尾朝太郎 浅尾為十郎	〃	〃	「安政2年卯6月29日昼」の墨書、浪花和田正板
安政4丁巳年6月	役割	かかみ山	中村翫八	市川海老蔵 中村大吉	清水賞七	鈴木屋善蔵	浪花和田正板
安政4丁巳年6月	〃	茶ノ湯かげ清 よし経こしごへ状	〃	尾上松緑 三桝大五郎	〃	〃	浪花和田正板
安政4丁巳年6月	〃	先代はぎ 戻り駕	〃	市川鰕十郎 山下金作	〃	〃	浪花和田正板
安政4丁巳年6月	〃	あこぎ 鏡山	〃	市川滝十郎 山下亀之丞	〃	〃	浪花和田正板
安政4丁巳年6月	〃	五大力	〃	沢村源次郎 片岡市蔵	〃	〃	浪花和田正板
(万延元庚申)年(6)月	触込		中村翫八	坂東亀蔵 藤川友吉	清水先勝軒	赤穂屋多三郎	「宮島大町坂田屋文右衛門」の捺印
(文久2壬戌)年(6)月	触込		中村翫八	嵐吉三郎 藤川友吉	清水松寿軒	赤穂屋多三郎	
文久2壬戌年6月	役割	忠臣講釈 兵庫屋	〃	三桝梅舎 中村雀右衛門	〃	〃	「6月3日夜」の墨書、浪花和田正板
文久2壬戌年6月	〃	いさり仇討	〃	市川滝十郎 中村登美三	〃	〃	「6月4日昼」の墨書、浪花和田正板
(文久3癸)亥年6月	触込		中村翫八	尾上松緑 中山いろは	松寿軒	赤穂屋多三郎	浪花和田正板
文久3癸亥年6月	役割	亀山後日	〃	三桝源之助 藤川鐘九郎	〃	〃	

年号年干支月	番付種別	外題	座本	役者	狂言作者	頭取・太夫元	備考
文久3癸亥年6月	役割	近江源氏 ひらい権八	中村翫八	浅尾朝太郎 嵐みんし	松寿軒	赤穂屋多三郎	「6月12日夜」の墨書、複製
文久3癸亥年6月	〃	かるかやどふしん	〃	嵐来芝 藤川花友	〃	〃	「6月15日夜」の墨書、複製
文久3癸亥年6月	〃	伊勢音頭 二人万ざい	〃	市川団二郎 三桝来右衛門	〃	〃	「6月18日夜」の墨書、複製
(元治元甲)子年6月	触込		中村翫八	中村雀右衛門 荻野扇女	清水松寿軒	赤穂屋多三郎	「広島多葉利」の捺印、 浪花和田正板
元治元甲子年6月	役割	盛衰記 金毘羅御利生 夕きり伊左衛門	〃	片岡我当 片岡小六郎	〃	〃	
元治元甲子年6月	〃	腰越状 お染久松	〃	三桝梅舎 中村琴三郎	〃	〃	
元治元甲子年6月	〃	仮名手本忠臣蔵	〃	市川男女蔵 藤川花友	〃	〃	「20夜」の墨書、複製
元治元甲子年6月	〃	太功記 隅田川	〃	市川鯉三郎 中村梅花	〃	〃	「25日夜」「御座敷」の墨書、複製
元治元甲子年6月	〃	傾城倭荘子 恋女房 矢口ノ渡し	〃	中村芝丸 藤川扇蔵	〃	〃	「28日夜」の墨書、複製
慶応元乙丑年6月	役割	菅原	中村翫八	中村雀右衛門 荻野扇女	清水舎	赤穂屋多三郎	「6月29日昼」の墨書、 浪花和田正板
慶応元乙丑年6月	〃	妹背山	〃	中村翫雀 中村伸助	〃	〃	「6月29日夜」の墨書、 浪花和田正板、 6月26日夜上演の番付(複製)あり
慶応元乙丑年6月	〃	忠臣蔵後日	〃	嵐徳三郎 嵐富三郎	〃	〃	「7月朔日夜」の墨書、 浪花和田正板
慶応元乙丑年6月	〃	廿四孝	〃	尾上松緑 藤川花友	〃	〃	「6月21日夜」の墨書、複製、 浪花和田正板
慶応元乙丑年6月	〃	天下茶屋	〃	中村宗十郎 中村琴三郎	〃	〃	「6月23日夜」の墨書、複製、 浪花和田正板
慶応元乙丑年6月	〃	先代萩	〃	浅尾玉六 中村寿郎	〃	〃	「6月27日昼」の墨書、複製、 浪花和田正板
(慶応元乙)丑年9月	触込		中村福助	坂東秀調 瀬川あやめ	奈河琴助	油屋小吉	複製

年号年干支月	番付種別	外題	座本	役者	狂言作者	頭取・太夫元	備考
(慶応2丙)寅年3月	役割	一の谷 てらこや	坂東三助	坂東三津五郎 瀬川あやめ	奈河米助	坂東鶴五郎	「天保13年」の墨書
(慶応2丙)寅年3月	〃	花川戸 夕きり	〃	坂東簑助 嵐三津右衛門	〃	〃	「天保13年」の墨書
(慶応2丙)寅年10月	触込		中村菊松	中村梅蔵 尾上松三郎	金沢良輔	中村菊蔵	複製
(慶応3丁)卯年3月	触込		中村菊松	嵐寿珏 嵐三花	金沢鬼勇	中村家菊松	手書き 複製
慶応3丁卯年6月	役割	巌流島 山姥	中村翫八	中村雀右衛門 沢村国太郎	清水舎	赤穂屋多三郎	「6月16日夜」の墨書、複製
慶応3丁卯年6月	〃	伊賀越敵討 恋女房	〃	実川延若 市川団二郎	〃	〃	「6月18日昼」の墨書、複製
慶応3丁卯年6月	〃	鬼一法眼 大経師	〃	嵐徳三郎 嵐富三郎	〃	〃	「6月19日昼」の墨書、複製
慶応3丁卯年	〃	かな手本忠臣蔵	〃	中村宗十郎 中山猪八	〃	〃	「20日昼夜」の墨書、複製
(明治元戊辰)年(6)月	触込		中村翫八	尾上多見蔵 嵐大三郎	清水賞七	奈良屋佐吉 (赤穂屋多三郎)	手書き、 この番付中の三桝大五郎は病気のため、尾上多見蔵と交代
(明治元戊)辰年6月	〃		〃	中村翫雀 中村七賀助	〃	〃	浪花和田正板、複製
明治元戊辰年6月	役割	朝顔日記 扇屋熊谷	〃	中村梅之助 市川筆之助	〃	〃	浪花和田正板、複製
明治元戊辰年6月	〃	いさり仇討	〃	嵐橘治郎 浅尾友蔵	〃	〃	浪花和田正板、複製
(明治2己)巳年6月	役割	ひこさん 国せんや	中村翫八	嵐雛助 市川筆之助	清水舎	赤穂屋多三郎	浪花和田正板、複製
(明治2己)巳年6月	〃	先代萩	〃	坂東彦三郎 中村七賀助	〃	〃	浪花和田正板、複製
(明治3庚午)年6月	役割	腰越状 石川染 白石噺	中村翫八	尾上多見蔵 おぎ野扇女	音羽矢当軒	嵐璃喜蔵	浪花和田正板、複製
(明治3庚午)年6月	〃	布引滝 志渡寺	〃	嵐吉三郎 中村雀右衛門	〃	〃	浪花和田正板、複製
(明治7甲戌)年7月	触込		中村友二	嵐雛助 山下八重菊	近松歌路助	三河左吉	大阪玉置清七板 複製
明治7甲戌年7月	役割	東土産恋の錦画 奥州安達原	〃	沢村国太郎 中村芝蔵	〃	〃	大阪玉置清七板 複製
明治7甲戌年7月	〃	五大力 植木屋	〃	嵐珏蔵 山下金作	〃	〃	大阪玉置清七板複製、 この年度に上演されたか否か、劇場との関係で検討を要する

年号年干支月	番付種別	外題	座本	役者	狂言作者	頭取・太夫元	備考
酉年 6月	役割	千本桜 千両幟	尾上若楽	市川仙松 嵐福松	奈河千助	木村早造	
不詳 6月	触込		藤川みさほ	藤川柳蔵 沢村吉松	並木兵吉	嵐熊十郎	「広島多葉利」の捺印 (注16)

(注) 1



寛政十七年九月吉日

新板大日本神社仏閣参詣数望

勧進元 京大仏

差添人 下野日光山

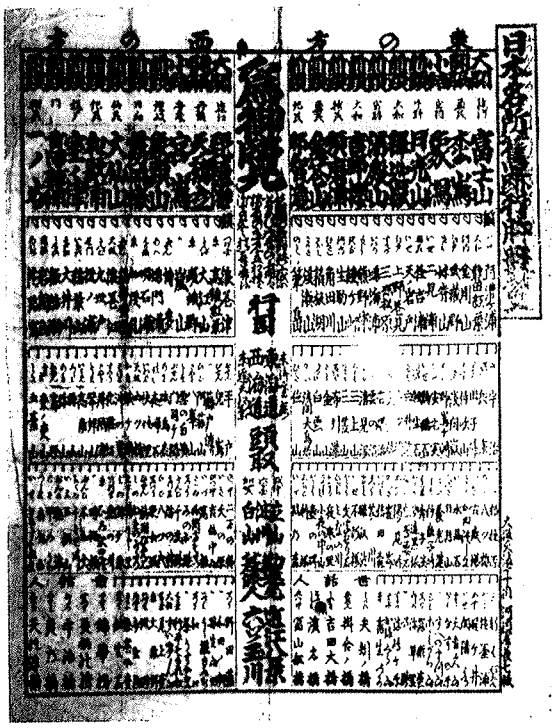
東方

大関 伊勢太神宮
関脇 京東本願寺
小結 讃州金毘羅
前頭 芸州厳島
同 京知恩院
同 山城愛宕山
同 伯州大山
同 甲州身延山
同 京賀茂社
同 江戸上野
同 和州興福寺
同 常州鹿島
同 近江多賀
同 和州多武峯
同 京北野社
同 仙台塩竈社
同 豊前宇佐八幡
同 尾州熱田社
同 同津島
同 近江山王宮
同 京東寺
同 同近江田上不動
同 松島瑞巌寺
同 象潟蚶満寺
同 信州戸隠
〃 同
〃 駿河富士権現
同 常陸筑波山
同 近江石山寺
同 丹後太神宮
同 備前由宇
同 唐崎賀
〃 いせ
同 上野妙義
同 和州上太
同 日向霧島嶽
同 豊後臼杵宮
同 肥前松浦明神
同 衣川金色堂
同 播州石宝殿
同 江戸芝神明
同 伊豆箱根権現
同 岩見物部社
同 宇治平等院
同 因幡龍峯寺
同 淡路宝冠寺
同 志摩滝宮
同 飛騨水無社
同 坂東杉本寺
同 伏見御香宮
同 大坂阿弥陀池
同 京誓願寺
同 同生玉宮
同 同清水座摩宮
同 同高津宮
同 大坂
同 伏見稲荷
同 神倉大
同 宮黒
同 姪子荷

西方

大関 京西本願寺
関脇 信州善光寺
小結 紀州高野寺
前頭 京吉田社
同 山城八幡宮
同 江戸浅草
同 遠州秋葉山
同 紀州熊野山
同 和州大峯山
同 紀州大坂天王寺
同 河内誉田八幡
同 播州多田院
同 京清水寺
同 甲州久能山
同 丹後内海明神
同 江戸五百羅漢
同 大坂天満天神
同 鎌倉江の島
同 播州中山寺
同 木曽御嶽
同 伊豆三島
〃 同
〃 甲州切戸ノ文殊
〃 長門和布刈社
〃 上総玉前社
〃 京金閣寺
〃 越後乙之大日
〃 山城鈴鹿社
〃 山城太秦太子
〃 いせ嵯峨釈迦
〃 美濃谷汲山
〃 佐渡小比叡山
〃 対馬御崎明神
〃 薩摩宝福寺
〃 安房那古寺
〃 下総香取
〃 筑前太宰府
〃 京祇園社
〃 山城笠置寺
〃 出羽黒山
〃 信州諏訪社
〃 和州法隆寺
〃 奈良大仏
〃 播州石宝殿
〃 江戸芝神明
〃 伊豆箱根権現
〃 肥前浦明神
〃 紀州熊野山
〃 大坂天王寺
〃 紀州根来寺
〃 和州大峯山
〃 遠州秋葉山
〃 江戸浅草
〃 山城八幡宮
〃 京吉田社
〃 紀州高野寺
〃 信州善光寺
〃 西本願寺
〃 同
〃 駿河富士権現
〃 常陸筑波山
〃 近江石山寺
〃 丹後太神宮
〃 備前由宇
〃 唐崎賀
〃 いせ
〃 上野妙義
〃 和州上太
〃 日向霧島嶽
〃 豊後臼杵宮
〃 肥前浦明神
〃 衣川金色堂
〃 播州石宝殿
〃 江戸芝神明
〃 伊豆箱根権現
〃 岩見物部社
〃 宇治平等院
〃 因幡龍峯寺
〃 淡路宝冠寺
〃 志摩滝宮
〃 飛騨水無社
〃 坂東杉本寺
〃 伏見御香宮
〃 大坂阿弥陀池
〃 京誓願寺
〃 同生玉宮
〃 同清水座摩宮
〃 同高津宮
同 大坂
同 伏見稲荷
同 神倉大
同 宮黒
同 姪子荷
同 播州能勢妙見
同 肥後阿蘇宮
同 能登惣持寺
同 紀州根来寺
同 同猿股寺
同 三河鳳来寺
同 鎌倉鶴ヶ岡
同 筑前箱崎
同 下総香取
同 筑前太宰府
同 京祇園社
同 山城笠置寺
同 出羽黒山
同 信州諏訪社
同 和州法隆寺
同 奈良大仏
同 大坂天王寺
同 紀州根来寺
同 和州大峯山
同 遠州秋葉山
同 山城八幡宮
同 京吉田社
同 紀州高野寺
同 信州善光寺
同 西本願寺
〃 同
〃 伊豆三島
〃 木曽御嶽
〃 播州中山寺
〃 鎌倉江の島
〃 大坂天満天神
〃 江戸五百羅漢
〃 丹後切戸ノ文殊
〃 甲州久能山
〃 同内海明神
〃 京清水寺
〃 播州多田院
〃 河内誉田八幡
〃 上総玉前社
〃 長門和布刈社
〃 京金閣寺
〃 越後乙之大日
〃 山城鈴鹿社
〃 山城太秦太子
〃 いせ嵯峨釈迦
〃 美濃谷汲山
〃 佐渡小比叡山
〃 対馬御崎明神
〃 薩摩宝福寺
〃 安房那古寺
〃 下総香取
〃 筑前太宰府
〃 京祇園社
〃 山城笠置寺
〃 出羽黒山
〃 信州諏訪社
〃 和州法隆寺
〃 奈良大仏
〃 大坂天王寺
〃 紀州根来寺
〃 和州大峯山
〃 遠州秋葉山
〃 江戸浅草
〃 山城八幡宮
〃 京吉田社
〃 紀州高野寺
〃 信州善光寺
〃 西本願寺
〃 同
〃 駿河富士権現
〃 常陸筑波山
〃 近江石山寺
〃 丹後太神宮
〃 備前由宇
〃 唐崎賀
〃 いせ
〃 上野妙義
〃 和州上太
〃 日向霧島嶽
〃 豊後臼杵宮
〃 肥前浦明神
〃 衣川金色堂
〃 播州石宝殿
〃 江戸芝神明
〃 伊豆箱根権現
〃 岩見物部社
〃 宇治平等院
〃 因幡龍峯寺
〃 淡路宝冠寺
〃 志摩滝宮
〃 飛騨水無社
〃 坂東杉本寺
〃 伏見御香宮
〃 大坂阿弥陀池
〃 京誓願寺
〃 同生玉宮
〃 同清水座摩宮
〃 同高津宮
同 大坂
同 伏見稲荷
同 神倉大
同 宮黒
同 姪子荷
同 同京真如宿
同 同京仏光寺
同 同江戸神田明神
同 江戸目黒不動
同 京百万遍
同 江戸黒谷深川八幡
同 安房那古寺
同 薩摩宝福寺
同 対馬御崎明神
同 佐渡小比叡山
同 美濃谷汲山
同 いせ嵯峨釈迦
同 山城鈴鹿社
同 山城太秦太子
同 出羽黒山
同 信州諏訪社
同 和州法隆寺
同 奈良大仏
同 大坂天王寺
同 紀州根来寺
同 和州大峯山
同 遠州秋葉山
同 江戸浅草
同 山城八幡宮
同 京吉田社
同 紀州高野寺
同 信州善光寺
同 西本願寺
〃 同
〃 伊豆三島
〃 木曽御嶽
〃 播州中山寺
〃 鎌倉江の島
〃 大坂天満天神
〃 江戸五百羅漢
〃 丹後切戸ノ文殊
〃 甲州久能山
〃 同内海明神
〃 京清水寺
〃 播州多田院
〃 河内誉田八幡
〃 上総玉前社
〃 長門和布刈社
〃 京金閣寺
〃 越後乙之大日
〃 山城鈴鹿社
〃 山城太秦太子
〃 いせ嵯峨釈迦
〃 美濃谷汲山
〃 佐渡小比叡山
〃 対馬御崎明神
〃 薩摩宝福寺
〃 安房那古寺
〃 下総香取
〃 筑前太宰府
〃 京祇園社
〃 山城笠置寺
〃 出羽黒山
〃 信州諏訪社
〃 和州法隆寺
〃 奈良大仏
〃 大坂天王寺
〃 紀州根来寺
〃 和州大峯山
〃 遠州秋葉山
〃 江戸浅草
〃 山城八幡宮
〃 京吉田社
〃 紀州高野寺
〃 信州善光寺
〃 西本願寺
〃 同
〃 駿河富士権現
〃 常陸筑波山
〃 近江石山寺
〃 丹後太神宮
〃 備前由宇
〃 唐崎賀
〃 いせ
〃 上野妙義
〃 和州上太
〃 日向霧島嶽
〃 豊後臼杵宮
〃 肥前浦明神
〃 衣川金色堂
〃 播州石宝殿
〃 江戸芝神明
〃 伊豆箱根権現
〃 岩見物部社
〃 宇治平等院
〃 因幡龍峯寺
〃 淡路宝冠寺
〃 志摩滝宮
〃 飛騨水無社
〃 坂東杉本寺
〃 伏見御香宮
〃 大坂阿弥陀池
〃 京誓願寺
〃 同生玉宮
〃 同清水座摩宮
〃 同高津宮
同 大坂
同 伏見稲荷
同 神倉大
同 宮黒
同 姪子荷

(注) 2



日本名所旧跡行脚数望

大坂天満十丁目河内屋長七板

東の方

大関	騎河	富士山
関脇	奥州	松島
小結	出羽	象潟
前頭	下野	日光山
前頭	大和	釈迦嶽
前頭	出羽	湯殿山
前頭	大和	吉野桜
前頭	摂州	須磨浦
前頭	奥州	金花山
前頭	紀州	那智滝

前頭	いせ	阿濃ヶ浦
同	大和	龍田紅葉
同	河内	金剛山
同	江戸	武蔵野
同	きしう	妹背山
同	いせ	二見浦
同	摂州	住吉浦
同	いせ	天ノ岩戸
同	江戸	上野花見
同	するが	三保松原
同	おはり	鳴海浦
同	きしう	熊野浦
同	越前	鐘ヶ岬
同	河内	生駒山
同	むさし	角田川
同	さがみ	箱根湖
同	わかさ	後瀬山
同	のと	筆島

同	山しろ	字治
同	せっつう	兵庫
同	するが	田子浦
同	あふみ	伊吹山
同	しなの	浅間嶽
同	あは	野島ヶ崎
同	かが	安宅関
同	いせ	鶏鳴石
同	しま	鳥羽石
同	はりま	鍵子浜
同	おうしう	安達黒塚
同	さがみ	鹿島要石
同	みかは	八ツ橋
同	しなの	更科
同	ゑっ中	有磯海
同	わかさ	糞の浜
同	するが	清見湊
同	ふみ	三上山
同	やまと	三笠山
同	せっつう	布引瀧
同	さど	金山
同	かつけ	白糸山
同	かい	浅間大島居
同	ひご	位山

同	しなの	桔梗原
同	ちくご	八ツ梅
同	しもおさ	古戦場
同	きしう	田辺浜ま
同	やまと	関清水
同	かづさ	水晶石
同	おうしう	日月山
同	ゝ	なすの原
同	みの	香久山
同	ゝ	すのまち山
同	さがみ	あしがら山
同	せっつう	岸姫松
同	山しろ	深草里
同	ゝ	鳴瀧
同	するが	浮嶋ヶ原
同	さがみ	かまくら山
同	京	畜生づか

同	京	軒ばむめ
同	おうしう	塩釜浦
同	あふみ	醍醐ヶ井
同	やまと	関清水
同	せっつう	天香久山
同	おうしう	なすの原
同	ゝ	すのまち山
同	ゝ	あしがら山
同	せっつう	岸姫松
同	山しろ	深草里
同	ゝ	鳴瀧
同	するが	浮嶋ヶ原
同	さがみ	かまくら山
同	京	畜生づか

同	ゝ	野田藤
同	ゝ	和田ノ岬
同	ゝ	丹生山田
同	ゝ	行基ヶ岳松
同	せっつう	茶うすやま
同	ゝ	江口
同	ゝ	淀もどし
同	はりま	大坂
同	はりま	尾上松
同	いづみ	大原野
同	あふみ	打出浜
同	さかい	浪花や松
同	せっつう	誕生石
同	すはう	錦帯橋
同	せっつう	長柄の橋
人	とやうみ	浜名橋
話	みかわ	吉田大橋
世	ゑちぜん	掛合ノ橋
同	みかは	矢矧ノ橋
同	ゝ	浮嶋ヶ原
同	ゝ	深草里
同	山しろ	鳴瀧
同	せっつう	岸姫松
同	ゝ	あしがら山
同	ゝ	すのまち山
同	おうしう	なすの原
同	きしう	天香久山
同	やまと	関清水
同	いせ	醍醐ヶ井
同	あふみ	塩釜浦
同	おうしう	軒ばむめ

西の方

大関	近江	琵琶海
関脇	丹後	天ノ橋立
小結	安芸	宮島
前頭	讃岐	象頭山
前頭	日向	霧島嶽
前頭	伯州	大仙山
前頭	紀州	和歌浦
前頭	播磨	室ノ津
前頭	同	高砂浦
前頭	摂州	一の谷

前頭	つの国	浪花津
同	京	高雄紅葉
同	たんば	大江山
同	京	嵯峨野
同	ゝ	嵐山
同	ちくぜん	博多
同	あは	鳴門浦
同	はりま	明石浦
同	京	加茂紙
同	ちくぜん	箱崎松原
同	大坂	浪花江
同	たんご	九世戸
同	長門	壇ノ浦
同	いなば	稲葉山
同	遠江	大井川
同	しなの	諏訪湖
同	周防	岩国山
同	あはぢ	淡路島

同	ひぜん	平戸
同	びぜん	児嶋
同	ゝ	藤戸渡り
同	ひご	阿蘇山
同	さぬき	八峯山
同	たじま	賀の白浜
同	ぶぜん	門司ヶ関
同	あは	鳴門松
同	とやうみ	夜啼石
同	いわみ	扶の里
同	大坂	四ツ橋
同	おうみ	桜原
同	さつま	坡ヶ岡
同	沖の嶋	箱崎
同	すはう	化粧坂
同	たじま	琴弾山
同	いわみ	高角山
同	ふしみ	桃山
同	ちくご	弥山
同	びんご	鞆浦
同	とさ	甲のうら
同	つしま	有明山
同	みまさか	粂ノ更山
同	とさ	五台山

同	ひぜん	二万の郷
同	びっ中	天の原
同	いき	吉備中山
同	びっ中	高根
同	いづみ	蛇国そつう
同	さかう	みのお瀧
同	せっつう	茶うすやま
同	ゝ	江口
同	せっつう	淀もどし
同	はりま	大坂
同	はりま	尾上松
同	ひご	行基ヶ岳松
同	さつま	防ずいけん山
同	防ぜん	千丈瀧
同	門司ヶ関	門司ヶ関
同	あは	鳴門松
同	とやうみ	夜啼石
同	いわみ	扶の里
同	大坂	四ツ橋
同	おうみ	桜原
同	さつま	坡ヶ岡
同	沖の嶋	箱崎
同	すはう	化粧坂
同	たじま	琴弾山
同	いわみ	高角山
同	ふしみ	桃山
同	ちくご	弥山
同	びんご	鞆浦
同	とさ	甲のうら
同	つしま	有明山
同	いせ	粂ノ更山

同	せっつう	野田藤
同	ゝ	和田ノ岬
同	ゝ	丹生山田
同	ゝ	行基ヶ岳松
同	せっつう	茶うすやま
同	ゝ	江口
同	ゝ	淀もどし
同	はりま	大坂
同	はりま	尾上松
同	いづみ	大原野
同	あふみ	打出浜
同	さかい	浪花や松
同	せっつう	誕生石
同	すはう	錦帯橋
世	せっつう	長柄の橋
話	山しろ	宇治橋
人	やまと	瀬乃橋
	あはじ	天の浮橋

為御覧

諸国の名所旧跡を一紙に書集む次第の不同は勝負の有見立相撲と御高免之程を奉希候

行司　東海道　京御宝楼
西海道　京通天紅葉

頭取　越中立山
六ヶ国淀川
加賀白山

勧進元　近江八景
差添人　六ツノ玉川

(注) 3

文政八年西の大新板

大関	江戸境町	中村座	前頭道頓堀 大西
関脇	江戸ふき屋町	市村座	同同 若太夫
小結	江戸本挽町	森田座	同甲州府中
前頭	尾張名古屋	橘町	同京
前頭	同	清寿院	同伊勢津
前頭	同	若宮八幡	同同
前頭	加賀	金沢川上	同仙台釈迦堂
前頭	芸州	宮島市	同越前三国
前頭	讃岐	金毘羅市	同九州みたじり
前頭	京	因幡薬師	同同
前頭	南都	河原戸	同下総銚子
前頭	紀州	若山建賃	同大坂堀江荒木

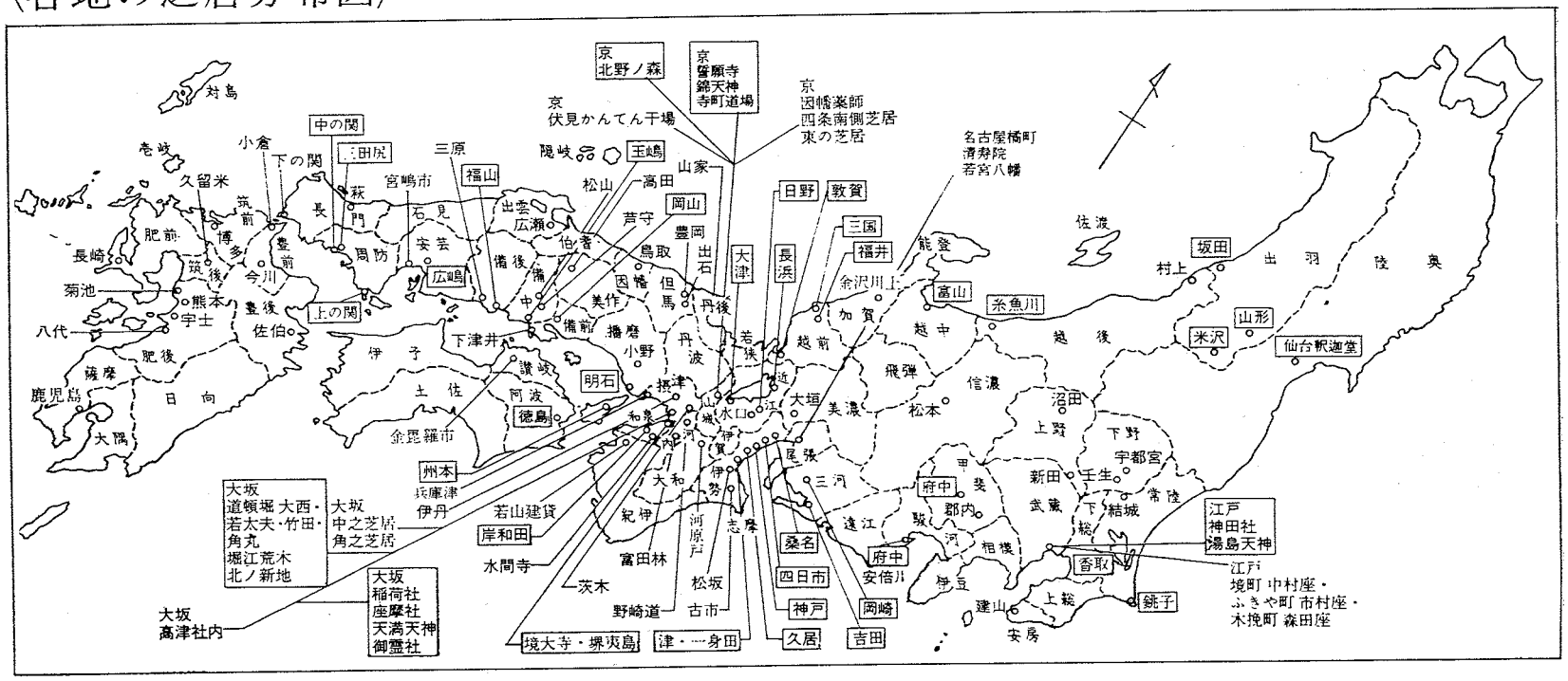
大関	大坂	中の芝居	前頭京寺町道場
関脇	同	角の芝居	同泉州堺大寺
小結	京	四条南側芝居	同同宿院
前頭	同	東の芝居	同大坂北之新地
前頭	伊勢	古市	同同竹田
前頭	同	中の地蔵	同同角丸
前頭	同	松坂	同江州大津
前頭	長門	萩	同越中高山
前頭	薩摩	鹿児島	同備前岡山
前頭	堀江	市の側	同同中の関
前頭	長州	下の関	同江州水口
前頭	同	常陸香取	同淡路須本
前頭	同	備後糸魚川	同阿州徳島
前頭	同	野崎道木	同同津の国
前頭	同	和泉水間寺	同同茨木
前頭	撰州	兵庫津	同同丹州上瀬山

下の段国々其城下に限りし常芝居にあらず

同	京	北野ノ森	同美濃大垣
同	大坂	天満天神	同肥前長崎
同	同	御霊社	同筑後久留米
同	名古屋	七ノ宮	同肥本くま
同	豊前小倉	但馬豊岡	同備中守野
同	播州明石	播磨小野	同備後芦山
同	芸州広島	同下総関宿	同同まつ山
同	同	有礒町	同上総関宿
同	同	上田	同美濃高田
同	江州長浜	同野州壬生	同肥後三宇
同	同	同備前日野	同備前原
同	備中玉島	同出雲	同津の国
同	阿州徳島	同備後福山	同同山上
同	同	同同	同同茨木
同	同	同同	同同伊丹
同	同	同同	同同上瀬
同	同	同同	同同原
同	同	同同	同同
同	同	同同	同同
同	同	同同	同同

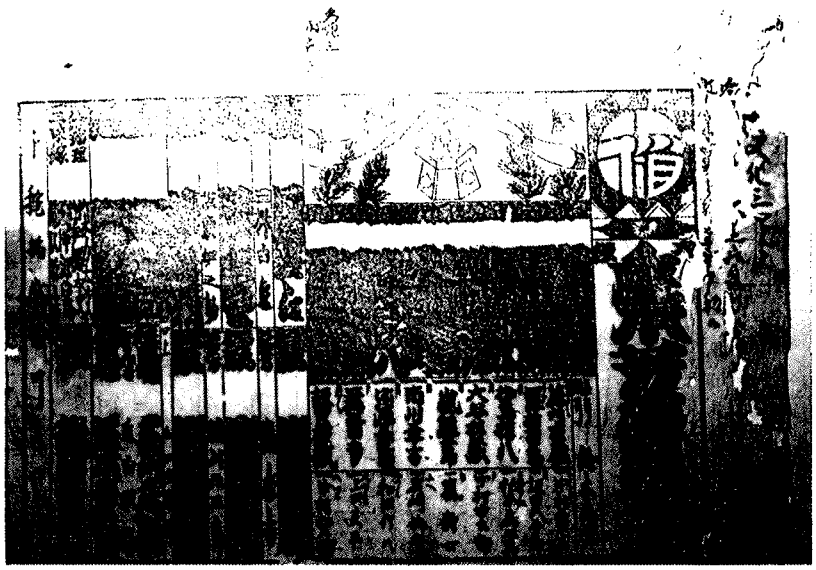
庵谷縦「文政八年板諸国芝居繁栄数望」（『芸能史研究』20）参照。なお、守屋毅「地方と歌舞伎」（芸能史研究会編『日本の古典芸能』第8巻歌舞伎、昭和46年 平凡社）に、この番付を下にして作成した分布図が収められている。参考までに一部省略したものを右に掲げておく。同書、p. 284～285。

〈各地の芝居分布図〉



境町中村座　番付の最上段にあげられたもの
道頓堀大西　番付の2段目にあげられたもの
江戸神田社　番付の3段目にあげられたもの
鳥取　番付の最下段にあげられたもの

（注）4



「文化三丙寅年」（墨書）

「文化三とら」（墨書）

宮嶋□□大芝居興行仕候間初日より賑々しく

御来駕之程奉希願候

大坂 座本 芳沢三な登（カ）

立役 坂東重太郎
立役 百村稲三郎
立役 三桝米五郎
立役 中村（　）蔵
立役 中村紋十郎
敵役 坂東岩右衛門
敵役 嵐　さの八
実悪 片岡国五郎
立役 三桝大五郎

若女形 片岡松江
子役 三桝由亀
若女形 芳沢三な登（カ）
子役 坂東伊之助
若女形 浅尾延彌
立役 三桝（　）郎
立役 中村音蔵
敵役 三桝他五郎
敵役 坂東猪三郎

一浄瑠理 竹本力太郎
竹本勝太夫
鶴沢源治郎
一三味線 鶴沢藤吉

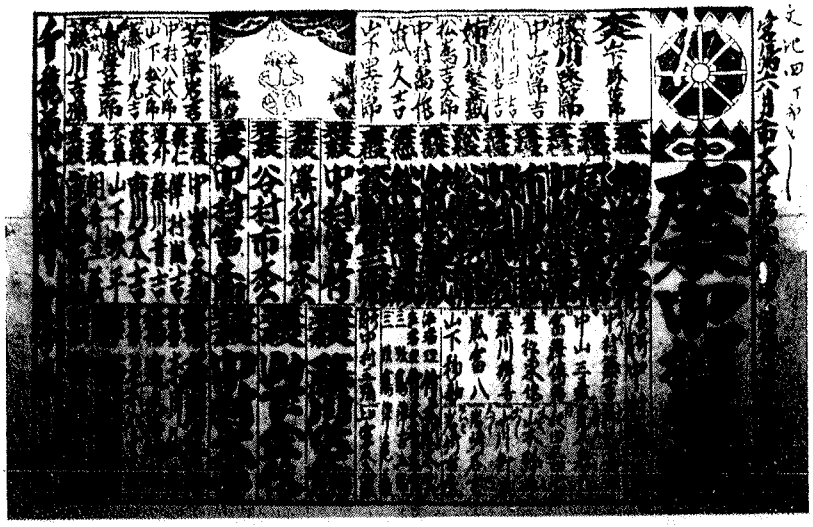
長歌 鈴木万里
歌 一立やく 藤川友蔵
一同やく 沢村市之助
一同 松島猪八
一同 大谷杉蔵
一同 嵐熊五郎
一同 市川松吉
一同 浅尾長之助
一同 三桝常吉
一立やく 坂東右蔵

一小うた 中村當吉
一同 坂田八五郎
一三味せん 杉本為三郎
一同 中村由兵衛
一同 嵐　新七
一ふへ 岩崎佐市
一小つゝミ 和田竹八
一大つゝミ 上田友平
一たいこ 中村治兵衛

若女形 中村君助
若衆方 嵐梅吉
若女形 山科（カ）廻吉
若衆方 藤川元三郎
若女形 中村吉治郎
口上 和田井専蔵
一狂言作者 奈川庄助
一狂言作者 近松理助
一狂言作者 並木喜多助
頭取 坂東辰右衛門

千秋万歳楽叶吉祥日

(注) 5



「文化四丁卯とし」（墨書）

宮嶋六月市大芝居興行仕候間賑々敷御来駕希奉候以上

座本　中村富之助

太夫　山下勝治郎
一若女形　藤川咲治郎
一子やく　中山治郎吉
一同　ふじ川三吉
一同　ふじ川善吉
一若衆方　姉川繁蔵
一同　松嶋吉太郎
一同　中村万作
一同　嵐久吉
一同　山下里治郎

一立役　榊山四郎太郎
一立役　江戸尾上紋三郎
一立役　中山徳三郎
一立役　市川虎蔵
一立役　中村市蔵
一敵役　松嶋万九郎
一実敵　嵐亀蔵
一実悪　松嶋浩蔵
一立役　江戸萩野伊三郎

一長歌つゝみ歌　中村兵治
一立やく　中村藤吉
一同　中山三蔵
一同　富沢伝治
一同　豊松東作
一同　藤川弁吉
一同　嵐富八
一同　山下初助

浄瑠理　竹本関太夫
浄瑠理　竹本花太夫
一三弦　鶴沢吉五郎
一三弦　鶴沢亀蔵
一ふり附　中村三弥
一口上　宮芝入蔵

一小うた　杵谷嘉市
一三味せん　荒木典八
一同　和田三四七
一ふへ　山本弥平
一小つゝミ　小川柳助
一大つゝミ　岩崎石吉
一たいこ　岩崎市蔵

一若女形　中村富竹
一若女形　沢村国松
一若女形　谷村市松
一若女形座本　中村富之助

一立役　中山紋之助
一親仁　沢村国吉
一道外　藤川音吉
一敵役　市川太吉
一花車　山下鉄平
一立役　朝井工蔵
一立役　浅尾四郎蔵

一狂言作者　奈川宗治
一狂言作者　奈川仙助
一狂言作者　近松瓶平
一狂言作者　並木八十七
一狂言作者　市岡和兵衛

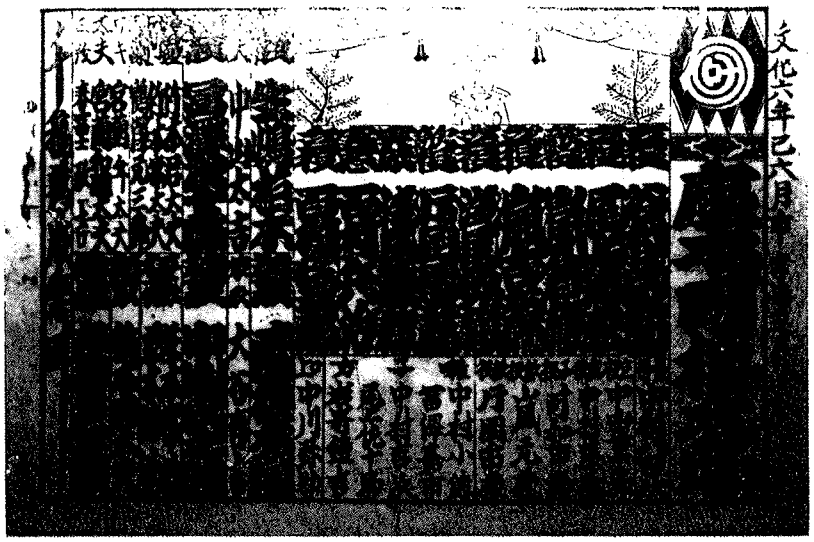
一子やく　芳沢岩吉
一同　中村八次郎
一同　山下松太郎
一同　藤川虎吉
一娘方　嵐豊三郎
一若女形　藤川吉彌

一若女形　藤川咲之助
一若女形　山下金作
一若女形　中村大吉

頭取　姉川虎蔵

千穐万歳楽叶吉祥日　末吉板

(注) 6



文化六年己六月市宮嶋芝居ニ而

座本　叶梅太郎

立役　谷村民之助
立役　尾上徳松
敵役　嵐倉蔵
立役　嵐吉太郎
立役　浅尾奥蔵
敵役　片岡国五郎
実敵　浅尾藤蔵
実悪　百村兵治
立役　百村氏五郎

長歌　中村八百次
立役　中村音十郎
立役　中村藤蔵
子役　叶和市郎
敵役　嵐元蔵
敵役　片岡市蔵

囃子方
中村小徳
冨沢嘉市
中村吉次
尾上佐十郎
岩崎鐘吉

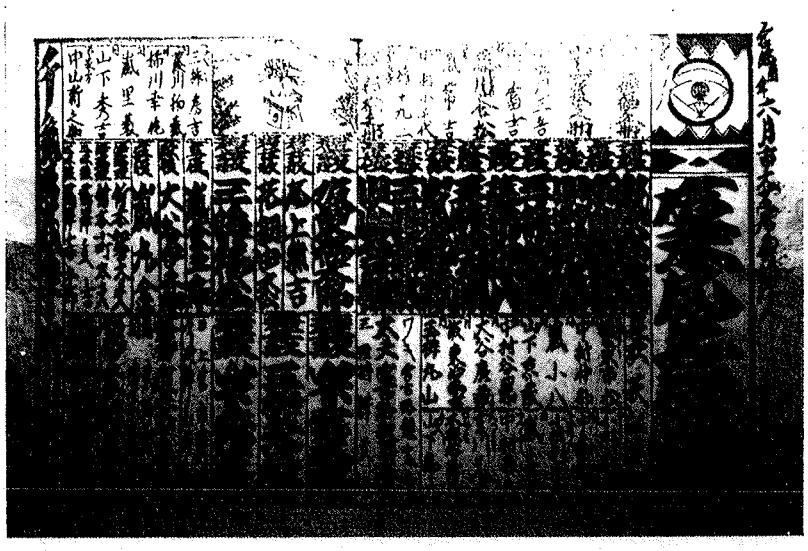
口上　中川弥助

若女形　生嶋柏木
太夫　中山太吉
若女形　冨沢友十郎
浄瑠理　竹本君太夫
同　竹本常太夫
三味線　鶴沢元三郎
ワキ　宮薗年太夫
太夫　宮薗和国太夫
三弦　春冨士政吉

若女形　叶梅太郎
娘方　大谷音吉
若女形　中山氏之助
狂言作者　並木常助
並木徳助
頭取　竹本君太夫
惣支配　吉野屋巳之助

千穐万歳　楽叶

(注) 7



宮嶋西年六月市大芝居興行仕候

座本　尾上徳治郎

太夫　三桝福之助

一子やく　中山紋之助
一同　小佐川三吾
一同　山下富吉
一娘方　藤川花松
一子やく　嵐常吉
一同　中村小千代
一同　三桝十九二
一若衆方　谷村松之助

一立役　嵐松之助
一立役　市川音吉
一立役　中山門九郎
一立役　三桝他蔵
一立役　藤川綱八
一敵役　三桝門之助
一実敵　嵐亀蔵
一実悪　三桝蘭駄
一立役　中山舎柳

一若女形　坂東福太郎
一若女形　尾上熊吉
一若女形　花桐由松
一若女形　三桝福松
一立役　嵐松五郎
一敵役　大谷伊之助
一立役　嵐丸金
一浄瑠璃　竹本伊勢太夫
一浄瑠璃　竹本小町太夫
一三味線　鶴沢文吉
一三味線　鶴沢吉五郎

一長歌　萩江定吉

一立やく　坂東市松
一同　中村仲助
一同　嵐小八
一同　山下京蔵
一同　中村谷四郎
一同　大谷廣蔵
一同　坂東治郎吉
一同　三桝丸山

一小うた　小川千作
一同　中嶋三ツ八
一三みせん　小佐川十九
一同　嵐嘉市
一小つゞみ　中村與八
一大つゝみ　芳川元七
一たいこ　木根谷清八
一ふへ　山下亀八

一若女形　山下富三郎
一若女形　三桝粂三郎
一若女形　山下秀治郎
一口上　宮市繁蔵
一ふり附　榊山時次
一狂言作者　近松十喜助
一同　奈河晴造
一同　並木寿作
一狂言作者　奈河政助
一頭取　中村三津蔵

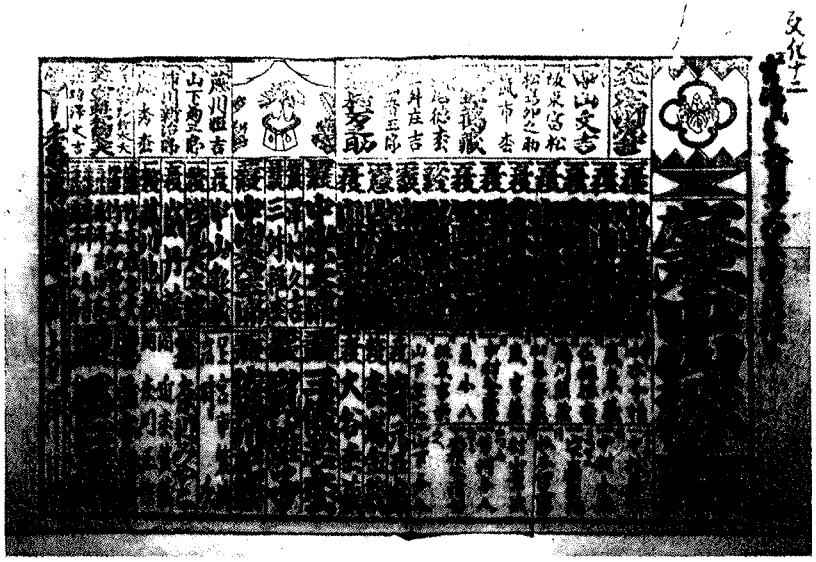
ワキ　宮古路鐘太夫
太夫　宮古路和国太夫
三弦　時沢文吾

千秋万歳楽叶吉祥日

一子やく　三桝房吉
一同　藤川初蔵
一同　姉川幸作
一同　嵐里菊
一同　山下秀吉
一若衆方　中山新之助

裏面に「多ばり」(墨書)

(注) 8



「文化十二」（黒書）

宮嶋戊年　六月市大芝居興行仕候

座本　中山源之助

太夫　小佐川虎吉

一子やく　中山文吉
一同　坂東富松
一同　松嶋卯之助
一同　嵐市松
一娘方　尾上万蔵
一子やく　浅尾徳松
一同　三升庄吉
一同　中山音五郎
一若衆方　谷村万之助

一立役　中山来太郎
一立役　中山来三
一立役　山村新九郎
一立役　中山吉太郎
一立役　水木種蔵
一立役　片岡国五郎
一立役　尾上七三郎
一敵役　嵐鬼蔵
一実敵　中山虎蔵
一実悪　山村儀右衛門
一立役　中山来助

一若女形　中山小太郎
一若女形　沢村久吉
一若女形　三升福松
一若女形　中山秀三郎

一立役　中山亀蔵
一敵役　浅尾大太郎
一立役　嵐丹蔵
一敵役　藤川他蔵
一浄瑠璃　竹本君太夫
一浄瑠璃　竹本伊勢太夫
一三味線　鶴沢直次郎
一三味線　鶴沢亀吉
一三味線　鶴沢市太郎

一子やく　藤川恒吉
一同　山下菊三郎
一同　姉川新治郎
一若衆方　嵐秀松

ワキ　宮古路鐘太夫
太夫　宮古路和国太夫
三弦　時沢文吉

一立役　水木今情
一同　嵐東蔵
一同　花桐徳松
一同　藤川熊蔵
一同　松嶋松蔵
一同　嵐吉蔵
一同　中村谷五郎
一同　嵐小九
一同　坂東吉松
一同　山下京花

一立役　嵐元五郎
一敵役　松嶋金蔵
一立役　大谷松蔵

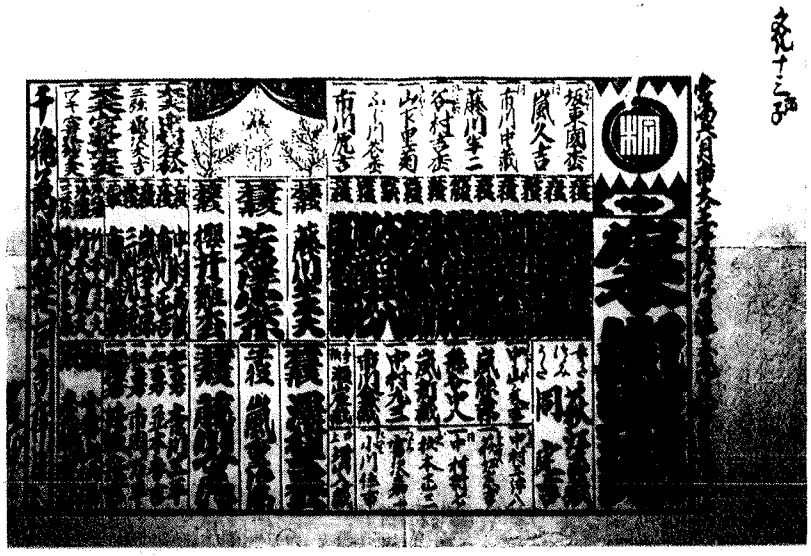
一若女形　三條若松
一若女形　嵐雛子
一若女形　佐野川花妻

一口上　宮市繁蔵
一ふり附　時次
一狂言作者　奈河みやこ
一同　近松豊蔵
一同　奈川正作
一狂言作者　並木兵蔵
一頭取　尾上七三郎

一小うた　中村嘉市
一同　中村小徳
一三味せん　山下嘉右エ門
一同　杉本伊三郎
一同　村山豊次
一小つゞみ　芳川与八
一たいこ　木根谷清七
一ふへ　山下与八

千穐万歳楽叶吉祥日

(注) 9



「文化十三丙子」（墨書）
宮嶋六月市大芝居奥行仕候間賑々敷御来駕奉希候以上

座本　嵐重治郎

一子やく　坂東国松
一同　嵐久吉
一同　市川中蔵
一　藤川半二
一丹前　谷村吉松
一子やく　山下里菊
一　ふじ川花松
一　市川虎吉

一立役　藤川藤蔵
一立役　松嶋松三郎
一敵役　市川伴蔵
一立役　中山兵太郎
一立役　松嶋万五郎
一立役実悪　花桐岩吉
一敵役　小倉山仙助
一色役　大谷亀蔵
一実敵　大谷三八
一実役　嵐哥七
一立役　嵐松之助

長うた　萩江正蔵
つゝみ　同
うた　定吉

一立やく　中山文吉
一　嵐熊五郎
一　亀谷中八
一　嵐新蔵
一　中村丸三
一　市川金蔵

一うた　中村三津八
一三みせん　萩江友吉
一同　中村新七
一ふへ　松本正三
一つづみ　富沢嘉一
一たいこ　小川住市

一ふり附　瀬山辰蔵
一口上　増上入蔵

一若女形　藤川半大夫
一若女形　芳沢小紫
一若女形　桜井雛松
一若女形　藤川みさほ

一子役　嵐重治郎
一若女形　沢村吉松

一太夫　中村若松
一三弦　鶴沢文吉
一太夫　宮路文字太夫（ママ）
一ワキ　宮古路鍾太夫

一立役　中村萬蔵
一立役　市川正吉
一立役　嵐幸三郎
一敵役　三桝老徳
一花車　市川崎蔵

一狂言方　奈川三平
一狂言方　並木春吉
一狂言方　市岡万平
一狂言作者　井坂兵吉

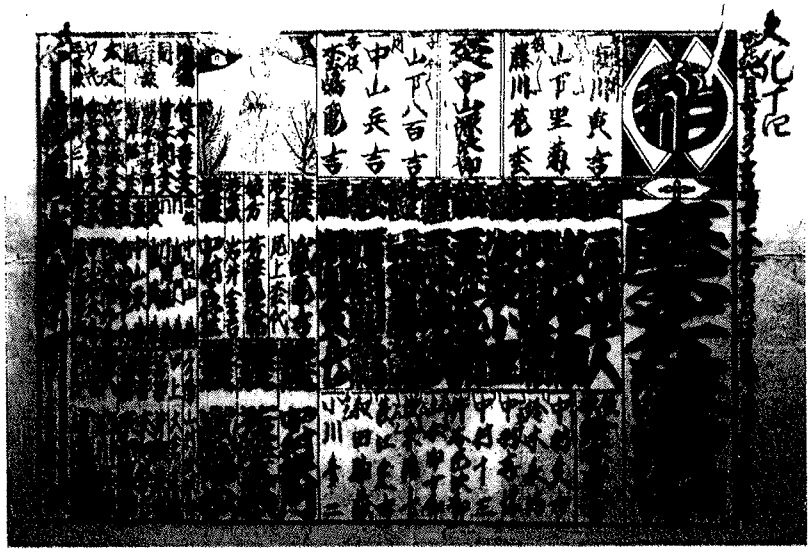
一浄瑠理　竹本今太夫
一浄瑠理　竹本梅太夫
一三味線　鶴沢吉五郎

一頭　小倉山仙助
一取　松嶋万五郎

千秋萬歳楽叶吉祥日

末吉板

(注)10



「文化十四」（墨書）

丑の六月吉日より宮嶋市大芝居興行仕候間賑々敷御来駕奉希候

座本　芳沢勲次郎

一子役丹前　市川寅吉
一娘かた　山下里菊
一娘かた　藤川花松
一太夫　中山源次郎
一子やく　山下八百吉
一同　中山兵吉
一子役　松嶋亀吉

一立役　三桝他人
一立役　嵐松之助
一立役　中山百次郎
一立役　坂東小重
一立役実悪　三桝大五郎
一色悪　三桝森蔵
一敵役　三桝為五郎
一実悪　片岡国五郎
一立役　中山文七

一若女形　嵐亀吉
一若女形　尾上松代
一娘方　芳沢亀次郎
一若女形　岩井金吾
一若女形　中村よね三
一立役　中村由蔵
一同　嵐門蔵
一同　片岡徳蔵
一敵役　嵐万蔵
一立役　中山東蔵
一立役　市川音十郎
一敵役　浅尾鐘九郎
一花車　中山安太郎
一敵役　尾上鐘右ヱ門

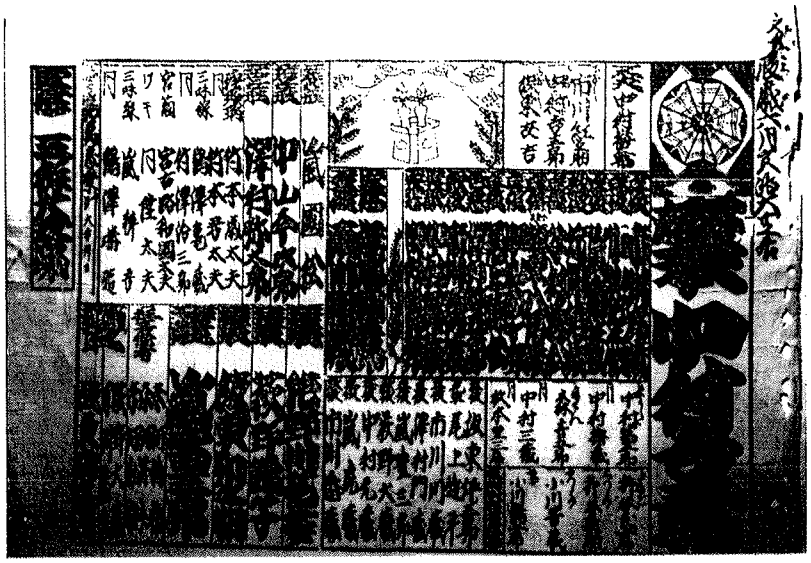
一長歌　鈴木豊吉
一長うた　中村文吉
一同　鈴木永治
一さみせん　中村喜蝶
一同　中村十三
一同　杵谷正次郎
一大つゝみ　山本卯十郎
一小つゝみ　坂東清七
一たいこ　萩江定吉
一同　和田助蔵
一ふゑ　小川弁二

一若女形　中村歌門
一若女形　芳沢嘉蔵
一若女形　嵐福松
一ふり附　山村友次郎
一口上　大倉金蔵
一狂言作者　井坂兵吉
一狂言作者　奈河弥七
一狂言作者　奈河鶴助
頭取　市川伴蔵
小倉山仙助

一浄瑠璃　竹本音太夫
一同　竹本関太夫
一三味線　鶴沢幸右ヱ門
一同　鶴沢福松
一太夫　宮古路歳太夫
一ワキ　宮古路花太夫
一三味線　鶴沢三蔵

千秋万歳楽叶吉祥日

(注)11



「文政三」（墨書）
辰歳六月宮嶋大芝居

座本　中村吉三郎

一太夫　中村梅太郎
一子やく　市川紅之助
一子やく　中村吉三郎
一子やく　坂東友吉

一立役　市川虎蔵
一立役　中山他之助
一立役　嵐　市蔵
一敵役　片岡清蔵
一立役　谷村徳松
一立役　坂東八尾蔵
一立役　中山紋十郎
一立役　尾上徳松
一色悪　沢村蝶五郎
一敵役　市川三河蔵
一実敵　中村貫蔵
一実悪　中村熊五郎
一実悪　浅尾国五郎
一立役　市川団蔵

一長うた　中村冨五郎
一同　中村楢蔵
一三味せん　森音五郎
一同　中村三蔵
一同　杉本里三郎

一立役　坂東伴三郎
一花車　尾上透平
一立役　市川川蔵
一立役　沢村門蔵
一立役　嵐豊三郎
一敵役　萩野大蔵
一立役　中村元蔵
一立役　嵐　虎蔵
一敵役　市川番蔵

一たいこ　柞谷民五郎
一大つゝみ　柞谷新助
一小つゝみ　小川晋蔵
一笛　小川鶴五郎
一振付　山村友次郎

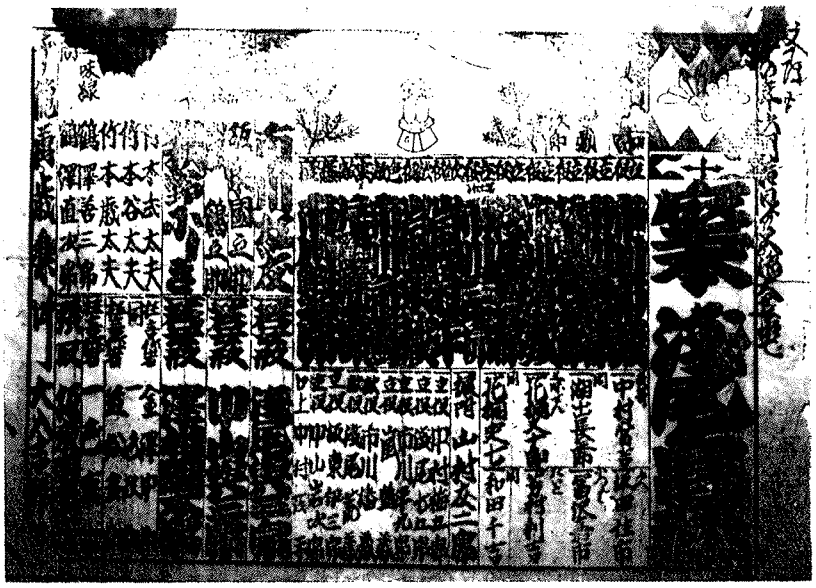
一若女形　嵐国松
一若女形　中山今次郎
一若女形　沢村弥太郎
一浄瑠璃　竹本歳太夫
一同　竹本君太夫
一三味線　鶴沢亀蔵
一同　竹沢治三郎
一宮薗　宮古路和国太夫
一ワキ　同陸太夫
一三味線　嵐弁吾
一同　鶴沢勝造

一若女形　佐野川花妻
一若女形　萩野錦子
一若女形　坂東卯之助
一若女形　嵐富三郎
一狂言作者　奈河時助
一狂言作者　奈河弥介
一狂言作者　奈河勘助
一頭取　萩野大蔵
一頭取　市川番蔵
一頭取　坂東国右衛門

実悪　三桝大五郎

千秋万歳楽叶大吉祥日

(注)12



「文政五」（墨書）

午の年六月吉日　宮嶋大芝居ニて

座本　浅尾亀蔵

一太夫　市川舎五郎
一子やく　浅尾亀蔵
一同　桐の谷本次郎

一立役　市川市蔵
一立役　市川新四郎
一立役　坂東岩太郎
一立役　市川浜蔵
一立役　浅尾国九郎
一立役　市川三十郎
一敵役　嵐冠平
一敵役　嵐東蔵
一色敵　市川市鶴
一実敵　片岡蝶十郎
一実悪立役　市川鰕十郎

富士松事

一長哥　中村當吉
一同　湖出長三郎
一三味線　花桐又十郎
一同　花桐定七

一振附　山村友二郎

一立役　中村梅五郎
一立役　浅尾七五郎
一立役　市川平九郎
一立役　嵐鶴蔵
一敵役　市川播蔵
一敵役　浅尾荒蔵
一立役　坂東伊三郎
一立役　中山岩次郎
一口上　中村茂平

一ふへ　坂田住市
一小つゝミ　富沢嘉市
一たいこ　芳村利吉
一同　和田千吉

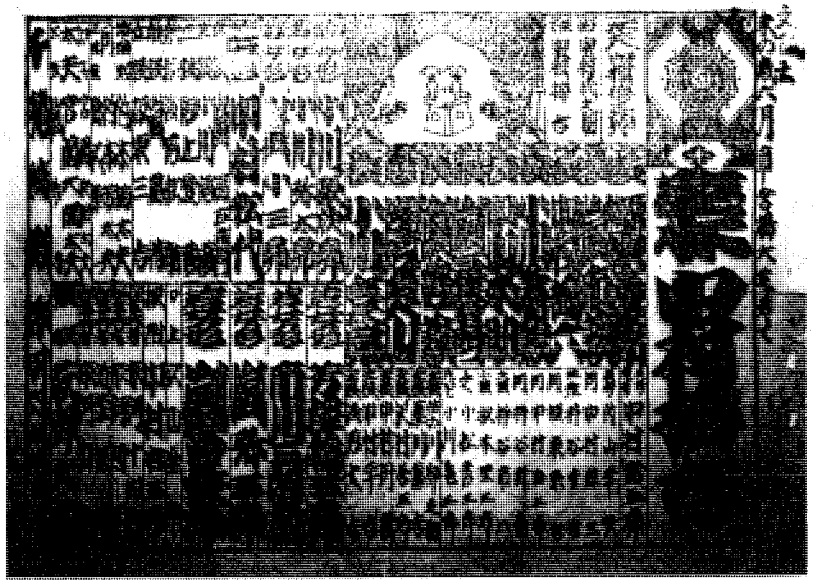
一若女形　市川紅友
一若女形　坂東国之助
一若女形　嵐鶴之助
一若女形　萩野にしき
一浄瑠璃　竹本式太夫
一同　竹本谷太夫
一同　竹本歳太夫
一三味線　鶴沢善三郎
一同　鶴沢直次郎

一若女形　浅尾與三郎
一若女形　中山與三郎
一若女形　沢村国太郎
一狂言作者　金沢中助
一同　一色政助
一狂言作者　近松多助
一狂言作者　一色應助
一頭取　坂東国右衛門

千穐万歳楽叶大入吉祥日

「いわ久」墨書

(注)13



「文政六」（墨書）
未の歳六月市宮嶋大芝居ニテ

裏面に「いわ国や久蔵」（墨書）

座本　中村梅吉

一太夫　中村梅三郎
一子役　中村民之助
一娘方　中村梅吉

一立役　坂東三津次郎
一立役　嵐市蔵
一立役　中村菊六
一立役　小川多賀蔵
一立役　中山来助
一色敵　嵐三津右ヱ門
一実敵　嵐亀蔵
一実悪　浅尾奥山
一立役　小川吉太郎

長哥　中村冨五郎
皷哥　竹山幸次
同　中村蝶三
三弦　杵谷音吉
同　坂東東吉
同　中村由三郎
杵谷新助
大皷　杵谷市八
小皷　杉本里三郎
ふへ　小松彦三郎
たいこ　小川亀三郎

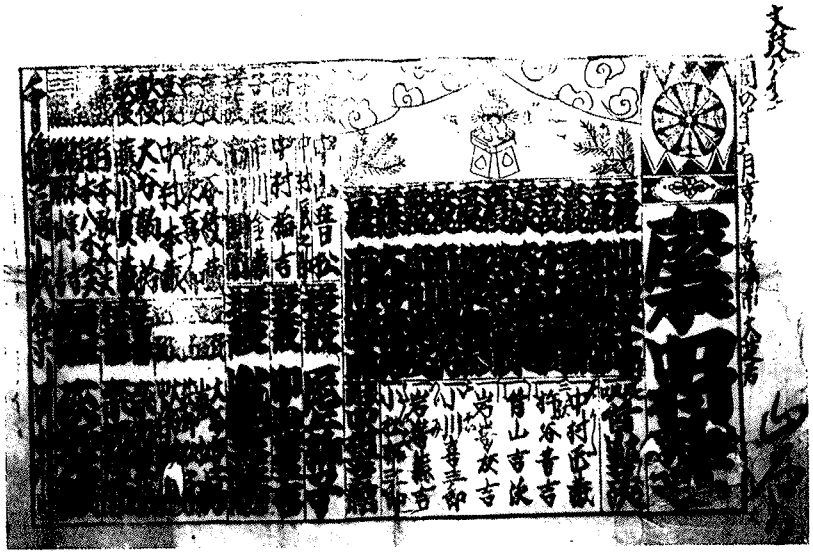
一立役　佐の川卯之助
一立役　藤川藤吉
一立役　沢村善五郎
一立役　中村丹蔵
一立役　中村平吉
一立役　浅尾太吉

一若女形　小川栄次郎
一若女形　小川弥太郎
一若女形　嵐小三郎
一若女形　中村松代
一立役　嵐富右衛門
一立役　小川亀蔵
一立役　尾上愛蔵
一敵役　浅尾松助
一敵役　嵐鶴清
一立役　坂東三吉
浄瑠璃　竹本梅太夫
同　竹本芳太夫
三味線　鶴沢薬一
ワキ　宮薗和国太夫
太夫　宮薗大隅太夫
三弦　嵐弁吾

一若女形　芳沢稲三郎
一若女形　市川三河之助
一若女形　嵐弥三郎
一若女形　嵐富美三郎
一口上　沢山金平
一振附　中村吉五郎
一狂言作者　奈河十四助
一狂言作者　奈河侍助
一狂言作者　近松里橋
一狂言作者　奈河力助
一頭取　萩野大蔵

千穐万歳楽叶大入吉祥日

(注)14



「文政八」（墨書）

酉の年六月吉日ヨリ宮嶋市大芝居

「岩久」（墨書）

座本　中村梅吉

一立役　中村京十郎
一立役　市川瀧之助
一立役　百村由三郎
一立役　水木卯左衛門
一実敵　大谷嶋右衛門
一立役　谷村金蔵
一立役　坂東桐徳
一敵役　市川黒治
一敵役　市川馬丈
一実悪　大谷友治
一立役　市川瀧十郎

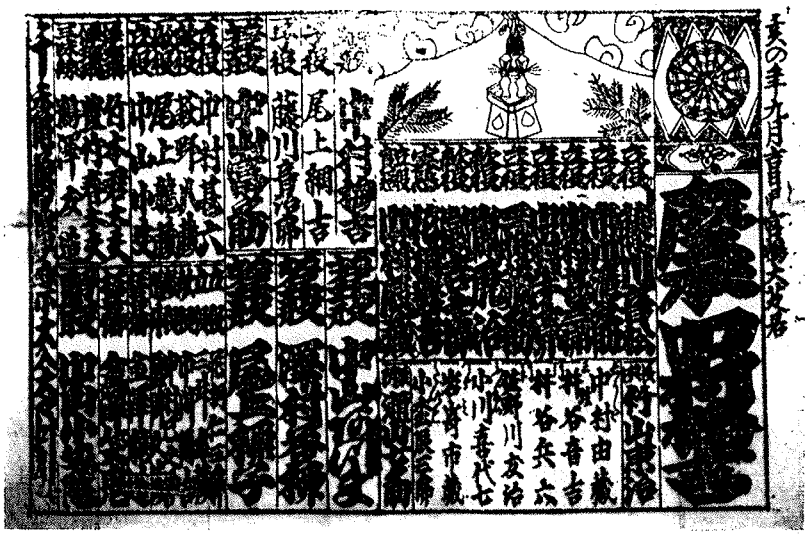
一長唄　竹山豊次
一長うた　中村正蔵
一三弦　杵谷音吉
一同　竹山吉次
一同　岩崎友吉
一ふゑ　小川喜三郎
一つゞみ　岩崎熊吉
一たいこ　小松卯三郎
一振附　中村吉五郎

一若女形　中山音松
一子役　中村辰之助
一丹子前役　中村梅吉
一子役　市川金蔵
一若女形　市川団市
一立役　大谷紋蔵
一立役　坂東喜十郎
一立役　中村本蔵
一敵役　大谷駒治
一敵役　藤川貫蔵
一浄瑠璃　竹本初太夫
一浄瑠璃　竹本八木太夫
一三味線　鶴沢宗吉
一三味線　鶴沢仙吉

一若女形　尾上柳子
一若女形　中山豊吉
一若女形　嵐三勝
一立役　大谷伊之助
一立役　嵐松蔵
一立役　萩野松之助
一立役　大谷金蔵
一立役　中村新蔵
一狂言作者　奈河繁蔵
一狂言作者　奈河侍助
一頭取　萩野大蔵

千秋万歳楽叶吉祥日

(注)15



亥の年九月吉日ヨリ宮嶋大芝居

座本　中村梅吉

一立役　藤川音松
一立役　市川滝之助
一立役　中村甚三郎
一立役　中村半十郎
一立役　三桝蔵之助
一敵役　嵐虎治
一敵役　嵐吉十郎
一実悪　花桐岩吉
一実立悪役　中村辰蔵

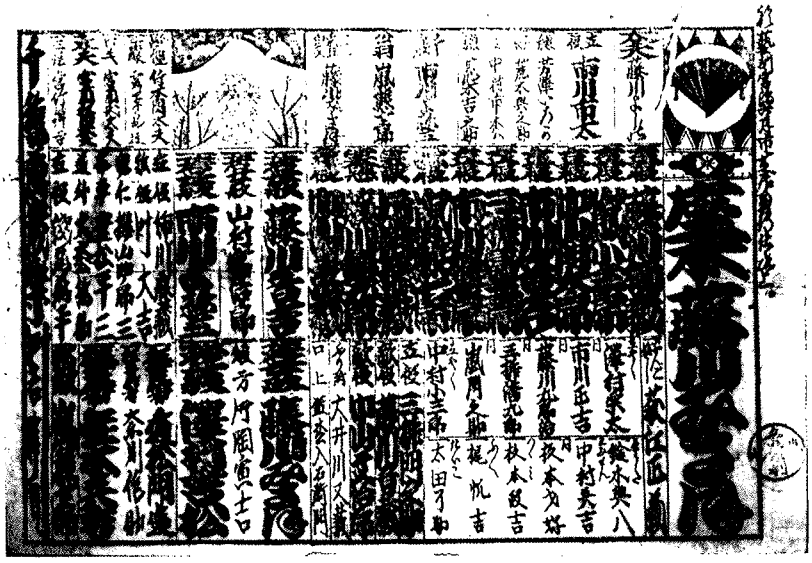
一長唄　竹山東治
一長うた　中村由蔵
一三弦　杵谷音吉
一同　杵谷兵六
一同　佐野川友治
一ふゑ　小川喜代七
一つゞみ　岩崎市蔵
一たいこ　小松辰三郎
一振附　瀬山七之助

一娘形　中村梅吉
一子役　尾上綱吉
一子役　藤川音治郎
一若女形　中山富之助
一立役　中村甚六
一敵役　萩野八蔵
一敵役　尾上龍蔵
一立役　中山小丈
一浄瑠璃　竹本君太夫
一浄瑠璃　豊竹春太夫
一三味線　鶴沢友造

一若女形　中山あつま
一若女形　沢村若柳
一若女形　尾上柳子
一立役　花桐仁三郎
一立役　三升金蔵
一敵役　市川萬吉
一敵役　中村巳之助
一道外　藤川久蔵
一狂言作者　金沢龍造
一狂言作者　金沢笑鬼
一頭取　中山小丈亮

千秋万歳楽大入大々叶吉祥日

(注)16



於藝州宮嶋六月市芝居興行仕候以上

（捺印）

座本　藤川みさほ

太夫　藤川よしの

一立役　市川市太
一娘方　芳沢いろか
一子役　荒木與之助
一同　中村市松
一娘方　荒木吉之助
千歳　市川よね三
翁　嵐熊十郎
三番叟　藤川みさほ

一立役　藤川柳蔵
一立役　嵐小三郎
一立役　中山門太郎
一立役　市川音吉
一立役　三桝富士太郎
一立役　市川権十郎
一敵役　嵐熊十郎
一実敵　片岡桝蔵
一実悪　藤川鐘九郎
一立役　中山文蔵

一ぶんごぶし　萩江正蔵
一立やく　沢村宗太
一同　市川正吉
一同　藤川九郎治
一同　三桝清九郎
一同　嵐門之助
一立やく　中村小三郎

一長うた　鈴木與八
一三味せん　中村兵吉
一同　杉本才好
一つゝミ　杉本政吉
一ふへ　梶帆吉
一たいこ　太田了助

一立役　三桝門之助
一敵役　藤川音蔵
一敵役　中山文治郎
一ふり附　大井川又蔵
一口上　盖松入右衛門

一若女形　藤川音吉
一若女形　山村富治郎
一若女形　市川よね三

一若女形　藤川みさほ
一娘方　片岡寅吉
一若女形　沢村吉松

一浄瑠理　竹本関太夫
一三味線　鶴沢亀造
一ワキ　宮薗氏太夫
一太夫　宮薗和国太夫
一三弦　宮竹弁吾

一立役　姉川辰蔵
一敵役　叶大吉
一親仁　桜山四郎三
一花車　豊松平三
一道外　大松桃助
一立役　浅尾万平

一狂言作者　近松門造
一狂言作者　奈川作助
一狂言作者　並木兵吉
一頭取　嵐熊十郎

千秋万歳　楽叶吉祥日

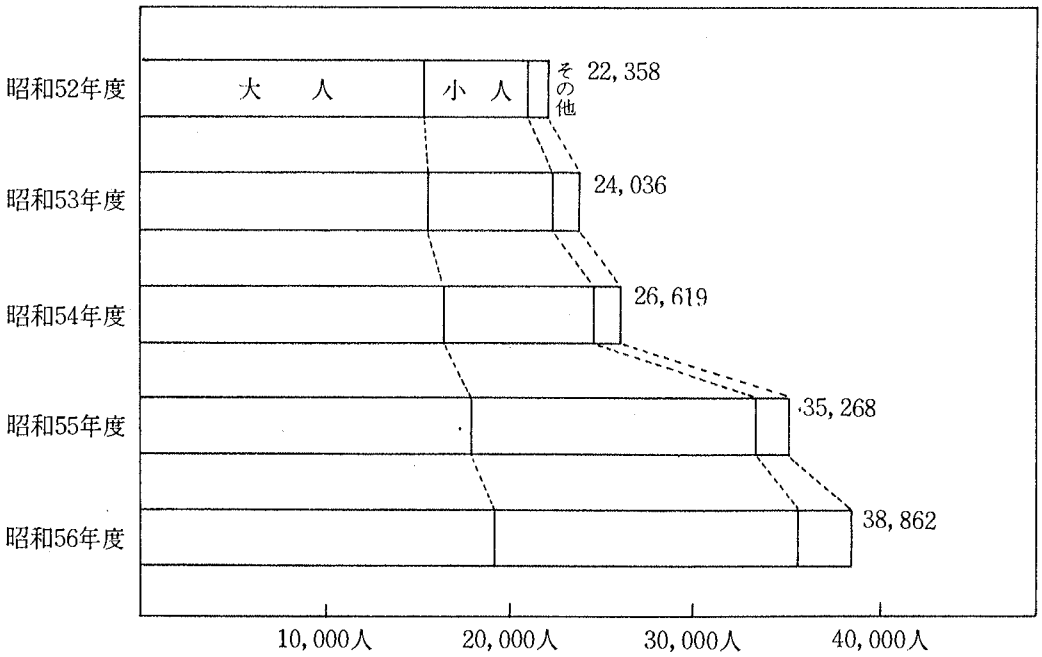
資料館の活動

1 入館者数　昭和56年度（開館以来の累計、203, 462）

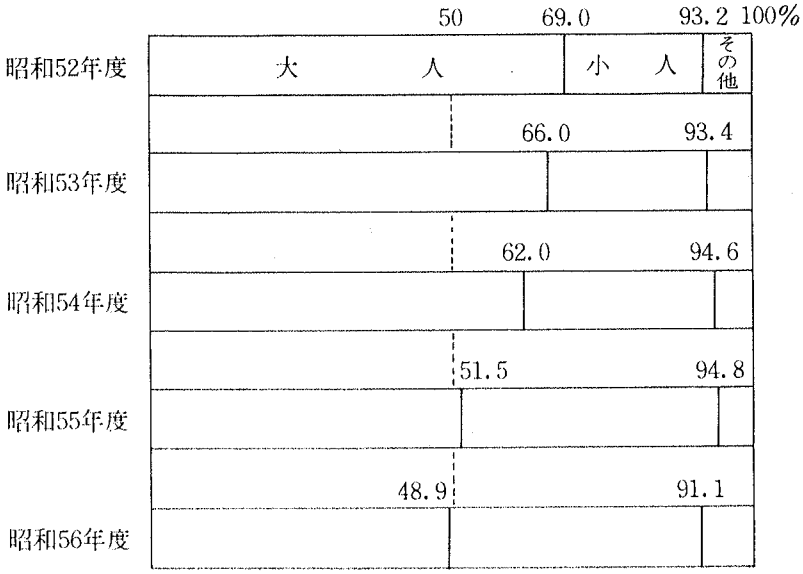
月	大人		計	小人		計	その他	合計
	個人	団体		個人	団体			
4	1, 270	92	1, 362	310	549	859	226	2, 447
5	1, 647	82	1, 729	24	3, 970	3, 994	403	6, 126
6	599	71	670	28	1, 901	1, 929	204	2, 803
7	1, 093	63	1, 156	174	130	304	223	1, 683
8	2, 648	33	2, 681	959	109	1, 068	428	4, 177
9	1, 183	97	1, 280	76	318	394	181	1, 855
10	1, 847	326	2, 173	132	3, 417	3, 549	351	6, 073
11	2, 548	66	2, 614	370	2, 412	2, 782	876	6, 272
12	597	—	597	38	—	38	81	716
1	1, 356	125	1, 481	212	—	212	72	1, 765
2	842	91	933	18	—	18	116	1, 067
3	2, 293	45	2, 338	456	787	1, 243	297	3, 878
計	17, 923	1, 091	19, 014	2, 797	13, 593	16, 390	3, 458	38, 862

＊小人は、小・中学生、その他は宮島町民・研究者など。休館日は、12月26日～12月31日。

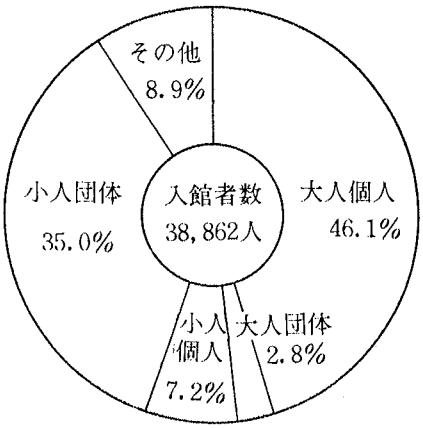
入館者数の推移　昭和52年度から昭和56年度まで



入館者構成の推移　昭和52年度から昭和56年度まで



入館者の構成　昭和56年度



2　年度別予算一覧

	昭和52年度	昭和53年度	昭和54年度	昭和55年度	昭和56年度	備考
	千	千	千	千	千	
報酬	1,799	436	450	468	528	資料館協議会委員
賃金	90	30	35	36	18	
報償費	30	100	110	110	60	展示資料借上謝礼など
旅費	150	100	273	153	258	
需用費	2,150	2,200	2,700	3,909	3,466	消耗品費・光熱水費・印刷製本費など
役務費	50	50	60	106	124	通信運搬費
委託料	3,195	3,821	5,629	3,899	3,708	事務補助・管理保守点検・庭園手入委託料など
使用料・賃借料		9	9	12	13	受信料など
工事請負費		1,500				補修工事費など
原材料費	50	50	50	50	78	資料作成・修繕用材料など
備品購入費	5,460	5,000	2,570	2,500	2,500	図書・展示資料購入費
負担金補助・交付金	1	1	460	486	496	学会協会負担金・補助金など
計	12,975	13,297	12,346	11,726	11,249	

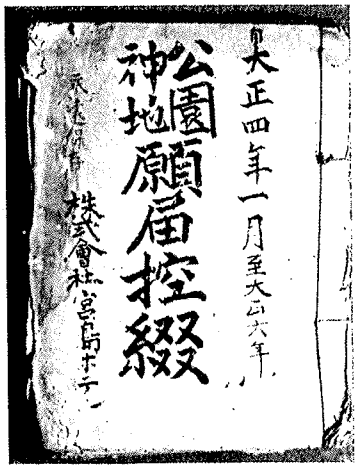
＊昭和53年度より副館長報酬は兼任のため減額する。

3 資料収集

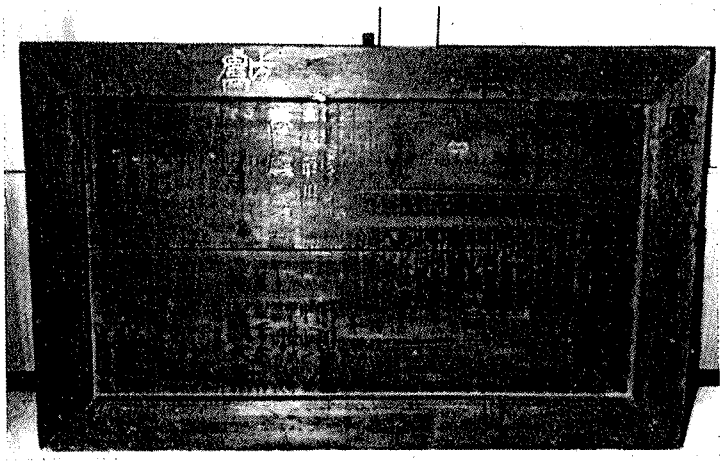
(1) 寄贈資料

資料名	寄贈者名	数量・その他
精霊棚	浜田 穆氏	1点
宮島ホテル絵はがき	森 啓造氏	1点、宮島ホテル発行
公園願届控綴神地	〃	1点、大正4年～6年
参考書綴	〃	1点、大正8年～昭和16年
宮島ホテル関係写真	〃	23点
宮島ホテル部屋割図	〃	1点
宮島ホテルメニュー	〃	1点
宮島ホテル平面図	〃	10点、大正6年
安芸国宮島ホテル新築設計図	〃	12点、ヤン・レツル設計
宮島ホテル新築設計図	〃	12点
宮島ホテル之図	〃	16点、複製
英連邦軍宿舎設計図	〃	1点、昭和21年、複製
濠軍第116部隊厳島養生院配置図	〃	1点、複製
宮島ホテル設計図送付添付書	〃	1点
昭和11年度入国外人統計	〃	1点
広島事業区地図	〃	1点、昭和9年、全9片の内第7片

資料名	寄贈者名	数量・その他
最新広島市街大地図	森 啓造氏	1点、昭和4年
宮島古絵葉書	中川頼雄氏	25点、大正～昭和初期
新築雑費覚帳	〃	1点、昭和6年、複製
義式目録	〃	1点、明治42年、複製
すり臼	原 政雄氏	1点、土製
鋤	〃	1点
唐箕	〃	1点
釣鐘	住田キミヨ氏	1点、芝居用
宮島芝居奉納篇額	〃	5点
宮島芝居番付	〃	10点
芝居番付	山下 中氏	67点、宮島・広島、複製
口上錦絵	〃	9点、宮島、複製
撮要記事抜萃	〃	1点、安政2年～明治25年、複製
視聴叢載抜萃	〃	4点、明治15年～19年、複製
浄瑠璃聞聴録	〃	1点、明治13年～25年、複製
俳優三十六花撰	〃	1点、明治3年、複製
(復刻)梅鶴閑話	〃	1点、慶応元年山下弘毅著



公園神地願届控綴


宮島芝居奉納篇額

(2) 寄 託 資 料

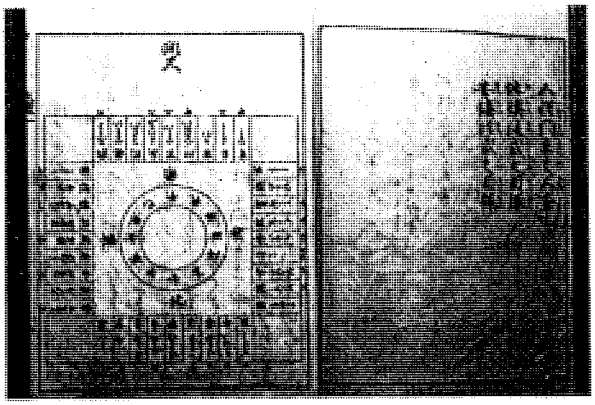
資料名	寄託者名	数量・その他
滑稽富士詣　初編	中川頼雄氏	1点、万延元年
〃　3編	〃	1点、〃
〃　4編	〃	1点、〃
〃　5編	〃	1点、〃
〃　6編	〃	1点、〃
〃　7編	〃	1点、〃
〃　8編	〃	1点、〃
匠家雛形 増補初心伝　中2	〃	1点、文化9年
〃　下1	〃	1点、〃
〃　下2	〃	1点、〃
大工秘伝書図解坤	〃	1点、享保12年
新編拾遺 大工規矩尺集　上	〃	1点、元禄13年
〃　中	〃	1点、〃
〃　下	〃	1点、〃
大匠手鑑　1	〃	1点、享保6年
〃　2	〃	1点、〃
〃　4	〃	1点、〃
増補 武家雛形　2	〃	1点
新版 武家雛形　2	〃	1点
新版 数寄屋雛形 3下	〃	1点
番匠 町家雛形　上	〃	1点、明和6年
番匠 秘事　1	〃	1点、正徳3年
作事注文 番匠往来　全	〃	1点、文政12年
棟上新始 匠家故諸式礼格 実録　上	〃	1点、享和3年
〃　中	〃	1点、〃
ほりものえほん下	〃	1点
謡本（定家、木賦景清、隅田川、雨月）	〃	1点、安永5年
小学新選算法	〃	1点、明治8年
大日本旧諸大名石高表	〃	1点、明治29年
習字帖版木	〃	8点
図画帖版木	〃	4点
生徒出席簿用版木	〃	1点、明治17年
産物宛名書用版木	〃	1点
煙水晶	林　宣親氏	1点、大元川沿い産

資料名	寄託者名	数量・その他
台	林　宣親氏	1点
三つ盃	〃	1点、亀井公拝領
島台三重盃	〃	1点、正月祝膳用、蒔絵
弁当箱一式	〃	1点、朱塗
ギヤマン・グラス	〃	1点
鏡箱	〃	1点、毛利家拝領、鏡2面入
綾織化粧箱	〃	1点、鏡2面入
香箱	〃	1点、蒔絵、松桐藤文様
百人一首	〃	1点
古今和歌集	〃	1点、源宣慶写
煙管入	〃	1点、黒漆塗、銭文様
硯蓋	〃	2点、漆塗
煙草盆	〃	1点、漆塗
引出し	〃	1点、六段重
水差	〃	1点
双六台	〃	1点
昌子内親王婚儀食器	〃	1点
〃　椀	〃	1点
薬籠	〃	1点
根付	〃	4点
魁茶碗	〃	2点、享和3年
足付平鉢	〃	1点、天保10年
腰付平鉢	〃	1点、〃
六角深鉢	〃	1点
片口	〃	1点、磁製
深鉢	〃	1点
鏡台	〃	1点、雛道具
衣桁	〃	1点、〃
飾棚	〃	2点、〃
煙草盆	〃	1点、〃
葛籠	〃	1点、〃
書棚	〃	1点、〃
鏡台	〃	1点、〃
食籠	〃	1点、〃
葛籠	〃	2点、〃
文箱	〃	1点、〃

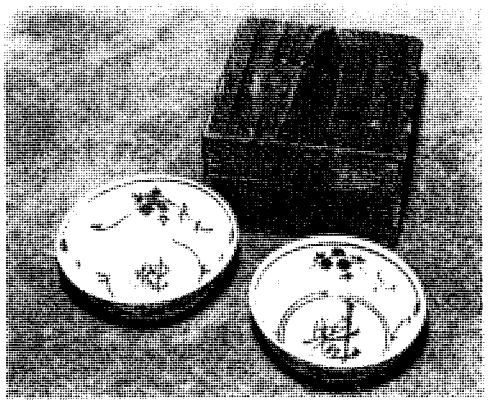
資料名	寄託者名	数量・その他
金盥	林　宣親氏	2点、雛道具
硯箱	〃	2点、　〃
文箱	〃	1点、　〃
丸型五枚入子	〃	1点、　〃
香台	〃	1点、　〃
角皿	〃	2点
鶴首徳利	〃	1点
丸鉢	〃	2点
かわらけ	〃	2点

資料名	寄託者名	数量・その他
丸深鉢	林　宣親氏	1点
丸皿	〃	2点
深鉢	〃	1点
笠	〃	1点
弓	〃	5点
薙刀	〃	1点
鞘	〃	1点、槍用
漆膳	〃	9点、文政8年

＊林氏の寄託資料について。同家住宅は、国の重要文化財に指定されており、昭和56年より2年計画でその修理を開始された。その間、同家所蔵の資料を一時資料館がお預りすることになり、展示可能な資料については、展示の許可を得ていたものである。今回、同家のご好意により資料の目録及び一部の写真を掲載した。ここに、感謝の意を表するとともに、一言付け加えておく次第である。



大匠手鑑

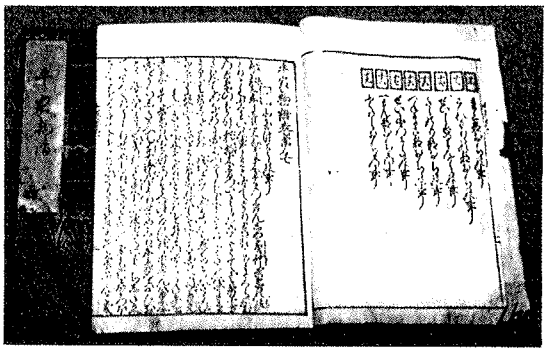


魁茶碗

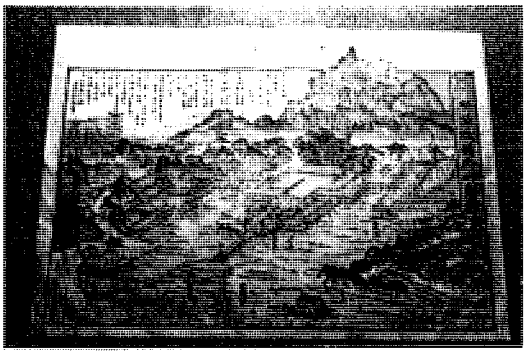
(3) 購入資料

資料名	数量・その他
平家物語　第1巻 第3～第12巻	1点、寛文12年版
社景図	1点、川瀬巴水画
芸州厳島神社図	1点、木版、嘉永4年版
厳島写真帖	1点、明治38年刊
厳島の風光　第1輯	1点

資料名	数量・その他
(復刻)山陽鉄道本線(神戸～下関間)時刻表	1点、明治36年
(復刻)大日本駅程宝鑑	1点、明治11年
(復刻)明治初期広島県管内全図(2葉)	1点、明治14年・明治25年



平家物語



芸州厳島神社図

(4) そ　の　他

宮島に関する文献資料の複写を、国立国会図書館、広島県立図書館、広島市立中央図書館等で行った。

4 調 査・研 究

(1) 館蔵資料の調査

館に所蔵している資料(約5000点)のうちカード化されているものは、未だ半数に過ぎず、また、分類別の台帳化も進んでいないため、これらのカード化・写真撮影等に重点をおいた。昭和56年度は、絵画・書跡資料の台帳の作成・写真の撮影、宮島芝居関係資料の目録を作成した。

(2) 露店関係資料の調査

ここ数年来継続してきた管絃祭の調査に関連して、各地の露店に関する資料調査を広島県立図書館等で行った。これによって、全国で催される露店市の期日・内容(特に大阪近辺)、その歴史等についての概略を知ることができた。

(3) 聴き取り調査

森啓造氏(明治32年生、元宮島ホテル専務)より、大正5年(1916)に外国人を対象として開設された宮島ホテルについて、それに至る経過(明治20年〜)、ホテルの機構・経営内容・経営関係者、及び、昭和27年8月の焼失等、ホテルの歴史の概要をうかがった(カセットテープ60分—2)。また、武内巌氏(明治35年生)からは、島巡りの宿・明治以降の宮島の芸能等についての聴き取りを行った(カセットテープ60分—2)。

聴き取りの内容については、今後、関係資料の収集を進め、随時発表していきたい。

また、昭和56年度は、「地方歴史民俗資料館収蔵状況等調査」(香川県教育委員会)、「公立文化施設の運営状況調査」(広島県教育委員会)、「古典籍所蔵調査」(国文学研究資料館)、「緊急民俗文化財分布調査」(広島県教育委員会)等の調査依頼を受けた。

なお、資料調査、研究会、研修会等への参加は、以下に記すとおりである。

昭和56年4月2日:資料調査(広島市)
4月9日: 〃 (〃)
5月13日: 〃 (〃)
5月15日〜16日:昭和56年度日博協中国支部総会(山口市)
5月20日:資料調査(廿日市町)
7月7日〜10日:昭和56年度日博協職員研修会(歴史部門)(高崎市)
7月16日〜17日:昭和56年度日博協中国支部研修会(岡山市)
7月31日:西日本人文系学芸員研究集会(福山市)
9月4日:広島県歴史民俗資料館等連絡協議会(高宮町)*
9月12日〜15日:日本民具学会(知多市)
11月17日:佐・竹文化財保護臨地研修会(千代田町)
昭和57年2月5日〜6日:広島県歴史民俗資料館等連絡協議会(三原市)
2月17日:資料調査(広島市)

* 昭和56年1月30日に、20館が参加して設立され、同年9月には、第1回の総会・研究会が開催された。今後は、こうした場を通して互いの連携を密にし、情報交換を行ないながら、個々の

館が抱えている問題、或いは、資料館等に共通してみられる課題の解決にあたる必要がある。その意味で、以下には参考のため、この協議会の規約、及び、参加館（但し、昭和57年９月11日現在）の名簿を掲げておく。

広島県歴史民俗資料館等連絡協議会

広島県における歴史民俗資料館・博物館等の歴史は新しく、その運営・資料収集・調査研究・展示方法等についても未開拓の部分が多い。そのため、県内の資料館及び関連施設との相互連携を密にし、研究協議によるそれら問題の解決をはかり、あわせて各資料館等事業の普及発展をはかることを企図して結成したものである。昭和55年７月19日、同年９月20日の準備会を経て、昭和56年１月30日に20館の参加のもとに設立した。

広島県歴史民俗資料館等連絡協議会規約

（名　　称） 第１条　本会は広島県歴史民俗資料館等連絡協議会と称する。

（事　務　局） 第２条　本会の事務局は、広島県立歴史民俗資料館内に置く。

（目　　的） 第３条　本会は広島県における歴史民俗資料館・博物館・郷土館等（以下「資料館」という）の相互連携を密にし、資料館事業の普及発展を図ることを目的とする。

（事　　業） 第４条　本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

(1) 資料館の管理運営に関する調査研究。

(2) 資料館相互の情報及び資料・出版物の交換並びに収蔵資料の貸借の斡旋。

(3) 資料館職員の研修に関する研究会・講演会等の開催。

(4) 会報その他の出版物の刊行。

(5) その他の必要な事業。

（会員と会費） 第５条　本会の会員は、会の目的に賛同した資料館及び資料館事業に関係ある団体とし、次に定める会費を納めたものとする。会費……年額5,000円

（役員と任期） 第６条　本会に次の役員を置く。任期は２年とし、再任をさまたげない。

(1) 会　長	１名	(2) 副会長	２名
(3) 理　事	７名	(4) 監　事	２名
(5) 事務局長	１名	(6) 事務局員	若干名

（役員の選出） 第７条　役員の選出は次のとおりとする。

(1) 理事と監事は、総会において選出する。

(2) 会長と副会長は、理事会において互選する。

(3) 事務局長と事務局員は、会長が指名する。

（役員の職務） 第８条　会長は、この会を代表し会務を総理する。

２　副会長は、会長を補佐し会長に事故のあった時、または会長が欠けた時は、その職務を代行する。

3　理事は、会務の運営にあたる。

4　監事は、会計その他を監査する。

5　事務局長は、事務局を総括する。

6　事務局員は、事務局においてこの会の事務を担当する。

（顧　　問）第９条　本会に顧問をおくことができる。

2　顧問は理事会の推薦により会長が委嘱する。

（会　　議）第10条　本会の会議は次のとおりとする。

(1)　総会は毎年１回開催し、この会の事業及び会計、役員の選任、会則の変更などの重要事項を決定する。

(2)　総会は、会員総数の２分の１以上の出席をもって成立し、出席者の過半数をもって決定する。ただし、規約の変更並びに本会の解散については、３分の２以上の同意を要する。

(3)　理事会は、必要に応じて会長が招集し、この会の運営について協議する。

（経　　費）第11条　本会の経費は、会費・寄附金及び事業収入、その他をもってあてる。

（会計年度）第12条　本会の会計年度は、毎年４月１日にはじまり、翌年３月31日に終る。

（そ の 他）第13条　この規約に定めるもののほか、この会の運営に関し必要なことがらは、会長が別に定めるものとする。

附　則

1．この規約は、昭和56年１月30日から施行する。

2．この会の設立当初の役員は、第６条の規定にかかわらず、その任期は昭和57年３月31日までとする。

広島県歴史民俗資料館等連絡協議会役員一覧（56･11･1現在）

会　長　広島県立歴史民俗資料館

副会長　福山城博物館　　宮島町歴史民俗資料館

理　事　因島市史料館　　熊野町歴史民俗資料館　　御調町歴史民俗資料館

　　高宮町歴史民俗資料館

監　事　神辺町歴史民俗資料館　　三原市歴史民俗資料館

広島県歴史民俗資料館等連絡協議会参加館一覧　（1982. 9. 11 現在）

名称	所在地	電話番号
1 因島市史料館	因島市中庄町寺迫	08452 (2) 1311 市 08452 (4) 0936
2 加計町教育委員会	山県郡加計町加計	08262 (2) 1111
3 神辺町歴史民俗資料館	深安郡神辺町川北6-1	08496 (3) 2361
4 久井町歴史民俗資料館	御調郡久井町江木	084732 7111 町
5 熊野町歴史民俗資料館	安芸郡熊野町中溝	08285 (4) 1121 町
6 神石町歴史民俗資料館	神石郡神石町永野36-1	08477 (2) 0942 町
7 下蒲刈町歴史民俗資料館	安芸郡下蒲刈町三ノ瀬	082365 2311 町
8 瀬戸田町歴史民俗資料館	豊田郡瀬戸田町瀬戸田	08452 (7) 1878 町
9 帝釈郷土館	比婆郡東城町帝釈未渡字野田原	08477 (6) 0001
10 高宮町歴史民俗資料館	高田郡高宮町佐々部字大畑1018	08265 (7) 0315 町
11 竹原市歴史民俗資料館	竹原市竹原町	08462 (2) 2270 市
12 千代田町歴史民俗資料館	山県郡千代田町古保利	082672 5040 082672 5109 町
13 日本はきもの博物館	福山市松永町364-1	08485 (3) 6644
14 広島県立歴史民俗資料館	三次市小田幸町字大平122	08246 (6) 2881
15 広島城郷土館	広島市中区基町21-1	0822 (21) 7512
16 福山城博物館	福山市丸之内1丁目8	0849 (22) 2117
17 御調町歴史民俗資料館	御調郡御調町市	08487 (6) 2111 町
18 三原市歴史民俗資料館	三原市円一町1834-33	08486 (2) 5595
19 宮島町歴史民俗資料館	佐伯郡宮島町57	08294 (4) 2019
20 湯来ベトナム館	佐伯郡湯来町	08298 (3) 0111
21 口和町立郷土資料館	比婆郡口和町永田	08248 (7) 2234 町
22 甲田町郷土館	高田郡甲田町上甲立	082645 4111 町

5　展　示・普　及

今年度は、常設展示の大幅な改訂、企画展示ともに行なっていない。また、夏休み中に中学生を対象とした資料館セミナーも諸般の事情で開催していない。

長期的な展望にたって、今後のあり方を模索していきたい。

なお、個別的な活動は以下のとおりである。

○「義太夫番付」（元治元年）の写真貸出し（八木書店）。

○教科書（大正２年、昭和10年）の貸出し（岩国市立学校教育資料館）。

○「宮島焼」の写真撮影（平凡社）。

○「厳島合戦図」の撮影（テレビ朝日）。

○「保存民家」・「二位法尼像」・「厳島図会」の撮影（中国放送）。

○「誓真像」・「誓信自作杓子」の撮影（テレビ新広島）。

○広島修道大学「博物館学」実習への協力。

○広島大学「民俗学」実習への協力。

○大野町郷土史講座の来島指導。

○広島郷土史会の来島指導。

○広島県警察学校の来島指導。

○小方中学校の来島指導。

○宮島中央公民館・郷土学習講座での発表「管絃祭の露店」。

○宮島町長寿大学での発表「宮島の町について」。

○宮島町役場厚生会での発表「宮島の民俗」。

○宮島中学校社会科郷土学習での発表「長州戦争と宮島」。

○　　〃　　「厳島合戦」。

○広島県文化振興会議、博物館資料館部会での発表「博物館・資料館活動における地域の協力と人材活用のあり方について」。

○広島県歴史民俗資料館等連絡協議会での発表「歴史民俗資料館の課題」。

○造幣局宮島研修会での発表「宮島の歴史」。

○広島市草津公民館での発表「宮島の歴史」。

○広報『みやじま』への寄稿「平清盛と宮島」。

○その他、学生の卒論・レポート作成、社会人の資料調査等に対する協力、及び、資料の貸出し件数は約15件である。

○年報 No.3（昭和55年度）の刊行。

Ｂ５版38ページ、昭和57年３月30日発行。

6　歴史民俗資料館協議会

昭和56年度資料館協議会委員

委員名（順不同）　◎は委員長，○は副委員長

後藤　陽一　広島修道大学教授
定宗　一宏　広島県立美術館長
斉藤　清三　広島県教育委員会文化課長
岡田貞治郎　広島県文化財審議委員
野坂　元良　厳島神社宮司
平山　真栄　大願寺住職
◎岩村　益文
小西　延穂
木上　晴登
宮郷　安輝
木村　義美　宮島町議会議長
森脇　立夫　宮島町議会副議長
西川　浩司　宮島町総務課長
○藤岡　国男　宮島町社会教育委員長
宮郷長太郎　宮島町議会議員

昭和56年度資料館協議会（昭和57年1月28日）

協議内容

○資料の収集・調査について

資料の収集・調査、聴き取り調査等については、限定したテーマの下に、一定期間集中して行う。また、そのテーマに応じた調査方法を工夫する。調査人員などから考えれば、町民の協力が得られるような方法を考え、そのための「組織」づくりをする必要がある。それによって、できあがった成果も町民にとってより親しみのもてるものになるのではないか（『町史』との関わり）。

○展示・普及等について

パンフレット、資料等は、単なる宣伝にとどめず、目的を明確にした配布の方法を考えるべきである。特に、学校教育や社会教育における文化財学習などで、利用できるような資料づくりや、その配布を行う。また、そのためにも、資料館の特性を水族館・神社等の他の施設の連携の中で知ってもらう必要がある（資料館の宮島の中での位置づけ）。

○収蔵庫等の施設について

博物館用途指定地との関連をどう調整するか。また、常設展示・企画展示などが、容易に行なわれるような、役割を明確にした展示室が必要であり、それと収蔵施設との関連を考えていく

べきではないか。

利用者にとって、より親切な施設を考えなければならない。

以上、内容的には、ほとんど前年度の協議会において議論されたものであり、そこで提出された問題点・課題が、今年度に繰り越されている状況にある。資料館として、それらの問題点等を克服していくために、何が不足しているのか、反省すべき点は何か、資料館のあり方等を、館の創設時に立ちかえりながら根本的に考えねばならない時期にある。

7　購入図書・受贈交換図書

購　入　図　書

編著者名	書　　名	出　　版
宇治市役所	宇治市史6	宇治市役所
	日本屏風絵集成、第1巻・別巻	講談社
	高僧遺墨	平凡社
みわしげを	石臼探訪	クオリ
平沢一雄	鋸	クオリ
	国史大辞典、第1巻・第2巻	吉川弘文館
秋山高志　他	図録　農民生活史事典	柏書房
秋山高志　他	図録　山漁村生活史事典	柏書房
	七十一番職人歌合・職人尽絵	恒和出版
天沼俊一	(復刻) 慶長以前の石燈籠	思文閣出版
	日本古文書学講座、1～11	雄山閣
	博物館学講座、第1巻～第10巻	雄山閣
長崎市	長崎市史、地誌編　名勝旧跡部	清文堂
	〃　仏寺部上・下	
	〃　神社教会部上・下	
	通交貿易編　東洋諸国部	
	〃　西洋諸国部	
	風俗編　上・下	
松崎寿和	広島県の考古学	吉川弘文館
村岡浅夫	広島県方言事典	南海堂
村岡浅夫	広島県民俗資料、8	ひろしまみんぞくの会
	日本庶民生活史料集成、第6巻、第28巻 第29巻	三一書房
高田郡史編さん委員会	高田郡史　資料編	高田郡町村会
	日本の民家、4・7	学研
寺院本末帳研究会	江戸幕府寺院本末帳集成、上・中・下	雄山閣
唐沢富太郎	教育博物館、上・中・下	ぎょうせい
	地方史マニュアル、1・5・6・9	柏書房
	ものと人間の文化史、1・4・5・7～10・12・15・16・18～20・22・25・	法政大学出版局

編著者名	書　　名	出　　版
	30・31・33・34・36～38・40-Ⅰ	
財団法人文化財虫害研究所	書籍・古文書等のむし・かび害保存の知識	財団法人文化財虫害研究所
	日本民俗学講座、1～5	朝倉書店
伊藤延男他	文化財講座、日本の建築、1～5	第一法規
石沢正男他	〃　、日本の無形文化財、1・2	
岡田　譲他	〃　、日本の美術、3～16	
	図説　日本文化の歴史、1～13	小学館
渋沢敬三	絵巻物による日本常民生活絵引、第1巻～第5巻	角川書店
柳田国男	海村生活の研究	日本民俗学会
六角弘	絵はがきが語る明治・大正・昭和史、下巻	ビッグ社
堺市役所	堺市史、第1巻～第8巻	清文堂
中国新聞社	1981　わが町ひろしま航空写真集	中国新聞社
	厳島神社能装束	京都書院
沖本常吉	津和野町史、第1巻・第2巻	津和野町史刊行会
林　英夫	日本名所風俗図会、17	角川書店
三原市役所	三原市史、第5巻	三原市役所
厳島神社収蔵庫建設委員会	厳島神社国宝並びに重要文化財防災施設工事報告書、第三部	厳島神社
日本風俗史学会	日本風俗史事典	弘文堂
逐次刊行物		
歴史学研究	491～502	
日本歴史	395～406	
地方史研究	169～172	
広島県文化財ニュース	89～92	
博物館研究	第16巻第4号～第17巻第3号	

受贈交換図書

〔広島県立歴史民俗資料館〕

みよし風土記の丘　No. 3

年報　昭和54年度

〔広島県埋蔵文化財調査センター〕

ひろしまの遺跡、第7号・第8号

〔広島県史編さん室〕

広島県史研究　第６号

〔広島県立美術館〕

広島県立美術館年報　昭和54年度

広島県立美術館年報　昭和55年度

〔広島県教育委員会〕

博物館・資料館の課題と方向

〔広島県立図書館〕

広島県立図書館所蔵　参考図書目録（年鑑・年報類編）

広島県内公共図書館　郷土資料目録、第20号・第21号

〔尾道市立美術館〕

尾道仏教美術展

〔広島市教育委員会〕

太田川の水運調査報告

末光遺跡群Ａ地点発掘調査略報

〔広島市公文書館〕

紀要　第４号

〔海田町〕

海田町史　資料編

〔廿日市町〕

廿日市町史　資料編Ⅳ

〔高宮町〕

高宮町の自然と文化

〔宮島町教育委員会〕

霊光―大聖院史―

〔五日市町教育委員会〕

池田城跡発掘調査概報

〔広島民俗学会〕

広島民俗　第16号

〔ひろしま郷土史研究会〕

ふるさとひろしま　第１号

〔電々公社宮島電報電話局〕

中国地方　電信電話歴史資料館

〔(株)鶴寿園緑化〕

ひろしま造園修景80選

〔中国新聞社〕

中・四国おもちゃ風土記

〔岡山県立博物館〕

岡山県立博物館だより、第15号～第17号

館蔵品目録(Ⅱ)

〔久賀町教育委員会〕

周防久賀の諸職、石工等諸職調査報告書(二)

〔山口県博物館協会〕

山口県の博物館

〔鹿児島県立博物館〕

鹿博だより、No. 1～No. 3

鹿児島県植物方言集

〔福岡市立歴史資料館〕

福岡市立歴史資料館　年報 No. 9

研究報告　第5集

〔神戸市教育委員会博物館創設準備室〕

創設準備だより、No. 2～No. 4

〔国立民族学博物館〕

国立民族学博物館　国内資料調査委員調査報告集　2

〔京都国立博物館〕

昭和55年度　京都国立博物館年報

〔近江歴史民俗博物館建設後援会〕

近江文化　20

〔奈良県立民俗博物館〕

奈良県立民俗博物館だより、第26号～第29号

民俗博物館研究紀要　第5号

〔和歌山県立博物館〕

和歌山県立博物館年報　7

〔石川県立郷土資料館〕

郷土資料館だより　第36号

十年のあゆみ　昭和43年～54年

わらの民具　夏季特別展図録

日本の眼鏡資料目録

〔平塚市博物館〕

平塚市博物館研究報告　自然と文化　No. 4

海と生活　No. 1—相模湾の魚と漁撈—

〔日本常民文化研究所〕

民具マンスリー　13巻2号

日本常民文化研究所　調査報告　第7集

〔紙の博物館〕

百万塔、第51号・第52号

〔目黒区教育委員会〕

目黒区美術博物館（仮称）設置の方針

目黒区が建設する美術博物館の基本構想のあり方についての答申

〔東京都近代文学博物館〕

'81要覧

館報　駒馬野　第32号

〔郵政省逓信博物館〕

資料図録、No. 17～No. 20

〔ペンタックス・ギャラリー〕

Pentax Gallerry News, No. 47・48～No. 50

〔日本通運株式会社〕

歴史にみる輸送の歩み

HISTORICAL MATERIALS OF JAPAN'S OLD-TIME TRANSPORTATION

〔保存科学研究所〕

会報　創刊号

〔船の科学館〕

船の科学館

〔サントリー美術館〕

サントリー美術館、第63号～第65号

〔東京国立博物館〕

日本の美　縄文から江戸時代まで

〔平凡社〕

日本やきもの集成　9

〔埼玉県立博物館〕

博物館だより　35号

〔埼玉県立民俗文化センター〕

みんぶんだより、創刊号・第2号

〔埼玉県立歴史資料館〕

館報　第2号

〔会津民俗館〕

会津民俗館だより、第4号・第5号

〔栃木県立郷土資料館〕

サルビア　No. 10

古山・中塩原の民俗

〔岩手県立農業博物館〕

農業博物館だより、No. 27～No. 29

〔秋田県立博物館〕

博物館ニュース、No. 27～No. 32

町史編さん室の活動

1. はじめに

昭和49年開館された資料館では、「宮島の特色を示し、地域の歴史を裏付ける資料の保存活用をはかり、郷土の歴史と文化に対する住民の知識と理解を深めることを目的」(『宮島歴史民俗資料館活動報告書』、昭和53年3月)として、広く資料の収集、調査研究をすすめてきている。

これらの活動をさらに充実させ、宗教、美術工芸、建築などあらゆる分野からの調査研究を行ない、宮島の歴史的全体像をより鮮明にすることを目的として町史の編さんが開始された。

ここでは、町史編さんの準備段階から現在(昭和57年3月)までの過程を紹介することによって、宮島の歴史を編さんすることの意義、その方法，さらにいま何が問題になっているのかを明らかにしていきたい。

2. 経過報告

昭和48年12月に町立宮島歴史民俗資料館が開設され，古くから町内で使用されていた日用品、諸道具などの民俗資料が収集、保存されるようになり、これらの資料をもとにして宮島でくらしていた人々の生活状態が明らかになりつつある。しかし現在のところ宮島には古代から現代にいたるまでの全体的歴史像を明らかにしたものがなく，数多くの国宝、重要文化財、史跡を有し、全島が国指定の特別史跡、特別名勝になっている宮島にとって、その歴史的意義を明らかにする必要が、資料館協議会をはじめ数多くの町民から叫ばれるにいたった。

これらの強い要望を受けて、宮島町が後藤陽一先生(広島大学名誉教授、宮島町文化財審議委員)に委員長をお願いし、町史編さん準備委員会をつくり、準備作業に入ったのは昭和54年7月のことであった。

近年の歴史ブームのなか、周辺市町村では記念事業的性格をもちつつ、各市域、町域、村域の歴史をあらゆる角度から専門的に調査研究し、市史、町史、村史の刊行をしており、いまや広島県史も完結が間近になっている。

そうしたなか、平氏ゆかりの厳島神社を中心として古代より特色のある歴史をもち、町内に数多くの国宝、重要文化財をふくみ、全島が特別史跡、特別名勝に指定されるという宮島の歴史的背景をいかにすれば明らかにできるかについて話し合われた。

宮島は、中世の貴族の厳島参拝をはじめとして、京都とのつながりも深く、江戸時代には広島藩主の参拝も頻繁にみられる。そして海上交通の拡がりによって筑前博多衆らの釣灯籠の寄進が行なわれ、文人墨客らによる詩歌、漢詩、紀行文などが多くつくられている。

また弥山を信仰の対象とする山岳宗教をはじめエビス、弁財天、さらには厳島神社の全国的拡がりにみられるように、古くよりその名が広く知られている。明治以降は、外国人の来島もみられるようになり、現在では毎年数多くの外国人をふくむ観光客が訪づれ、日本全国はもとより、国際的

な拡がりをもつにいたっている。

一方、島内生活の成り立ちは、南北朝頃までの神事関係者の移住をはじめとし、その生活を支える各種職業の人々の移住によってはじまったと考えられている。そして市立を中心とする物資の交易に携わる廻運業者、問屋、宿屋などが成立していった。

島という空間的に限られた地域であり、主要な生産基盤をもたない宮島では、流通（人の動きもふくめて）のなかでいかにその生活を維持していくかということに多大の配慮が払われており、例えば市立の節、客寄せのために開かれた富くじ興行、木版画をはじめ明治期における各種観光案内書など、家の構造、風俗習慣などに特徴がみられる。それらについては『厳島民俗資料緊急調査報告書』（広島県教育委員会編　昭和47年）によって明らかにされている。

しかし、江戸時代に限ってみても、文献資料の残存が、神社、寺などに限られており、町の形成、構造、行政機構、交易など不明なところが多く残されている。

そのため宮島の歴史的全体像を明らかにするには、二つの方向からの調査研究が考えられる。

例えば、建築についてみれば、宮島に存在する建築物の構造、材料、技術の徹底的な調査からその特徴を明らかにするとともに、建築史上において宮島の建築物がどのような位置にあるのか、さらにそれらが人々の生活のなかでどのように扱われてきたのか―単に文化財として守るという消極的な意味だけでなく、いかに生きた使い方をして生活のなかにとり込んできたのか―ということを考えなければならないのではないか。

また、島の生活物資がどのような経路で運ばれるのか、島の特産たとえば木工品の材料の供給、道具、技術の普及経路、さらに販路やその機構、大東の生産およびその移出先等々を明らかにするためには、瀬戸内海地域における物の流れのなかで宮島をどう位置づけるのか、などの問題が解決されなければならない。

すなわち、宮島を考える場合、外に拡がっていく視点と、内へむかう２つの視点からの究明が重要となってくるのではなかろうか。

そのためには、従来見落されがちであった資料、例えば、民具この語の定義はいまだ諸説があるが，人が使うすべてのものとしての民具や領収書の１枚にまでその眼を向け、何百年もの時間の流れのなかで受け継いできた文化遺産はもとより、これから将来に向けて今の我々は何を引き継いでいくかという観点から町域を越えた範囲に渉る資料の調査収集を考えなければならない。

そしてこれらの総合的学術的調査に基づいた歴史書を編さんすれば、宮島の歴史的全体像はより明らかとなり，その歴史書は、学問的価値は言うまでもなく、文化運動のテキストとして、あるいはまた宮島を訪づれる人々への宮島紹介の材料となり，いわば宮島のバイブルとしての価値をもつものとなるであろう。

このような「宮島のバイブル」をつくるためには、どのような形が望まれ、そのための体制、編さん方針、調査の方法はいかにすべきかが、準備委員会で検討され、広く宮島に関心をもつ人々からの意見を伺うことによりその具体的イメージをつくることが望まれた。

宮島町では、昭和55年５月中央公民館２階に編さん室を開設し、専門員１名、事務職員１名を配備した。

編さん室では、準備委員会の意向をうけて、宮島の編さん体制、調査方法を考える資料を提供するため、近隣市町村の市町村史編さんのあり方を調査するとともに、宮島と同様多くの文化財をもち、古くからその名が知られ現在多くの観光客の訪づれる京都、奈良、鎌倉などの市史編さんのあり方について調査した。

従来の編さんに対する取り組み方は、ほとんどが行政機構のなかで「委員会」として位置付けられており、行政が市町村史に積極的な姿勢をもつようになってきている。その意味で、町の同和教育、社会教育などのなかで町史の編さんに取り組んでいる廿日市町の編さんのあり方は、従来にはない新しいものとして注目されている。

ところで京都市では、昭和40年に京都市史編さん所を設置し、通史編10巻を刊行し、現在資料編の編集、刊行をすすめている。市史の編さんにおいて「編さん所」を設置した例はなく、その取り組みの真剣さが窺われる。また書名を『京都の歴史』とすることにより、多数の読者を得るとともに、歴史的変遷のなかで「市民」がどのように形成され、これまでの京都をつくり、さらには将来の京都をつくり上げていくかを歴史叙述の中心にしている。

ただ生活用具から見た「市民」像へのアプローチが乏しい点に、若干の疑問が残るが、多くの文化財を有する京都市の編さんのあり方は、宮島にとっておおいに参考にすべきであろう。ちなみに第2巻『中世の明暗』には、「平泉と厳島」という節で、平安貴族の厳島参拝が取り上げられている。

つぎに、行政主体のある地域にかぎらず、より広い地域からその市の歴史を把える試みを行なったのが大津市である。大津市は、琵琶湖の南西に位置し、京都と北陸とを結ぶ琵琶湖の湖上交通の要衝である。琵琶湖という地理的要因が、大津の歴史的変遷のなかでは大きな比重をもっており、かつ周辺地域の歴史的背景をぬきにしては大津の歴史は成立しない。このような考えから、「景観史学」という歴史学と地理学の新しい試みによって、琵琶湖周辺地域と大津を「環湖共同体」として把えて、大津の歴史を明らかにしている。

宮島も、瀬戸内海周辺地域とは深い関係にあり、湖と海のちがいはあるが、「瀬戸内海共同体」的発想からのアプローチも可能であり、このような編さんのあり方も全国的レベルでみればすでに行なわれているのである。

このほか、市民の文化活動のなかに市史の編さんを位置づけているのが千葉県の我孫子市である。ここでは「市民による市史づくり」を呼びかけ、市内在住の会社員、主婦たちが、自分たちの手で調査収集した資料をもちより、研究会をひらき、調査の報告を「市史研究」としてまとめている。我孫子市は、東京のベッドタウン的性格が強いためか、多くの市民が新しく移り住んだ人々であり、自分たちの住む市の歴史に対する強い欲求がみられる。

概して、埼玉県、神奈川県などでは、市町村史の編さんが、資料館、図書館、文書館などの文化活動のなかですすめられており、地域住民の歴史認識が高まりつつあるという。

このような状況の下、宮島が歴史編さんの第三の道を築くことが大きな課題ではなかろうか。

そうしたさなか、昭和56年1月末、宮本常一先生が亡くなられた。

先生は、『報告書』では民俗部門とくに生産、生業、交通、運輸、交易、民具などを担当され、宮

島の人々の生活を解明するにはなくてはならない人であり、さらには編さんのあり方自体についてもそのご意見を伺わねばならない人であった。

慎しんでご冥福をお祈りします。

宮島町は、町史編さん事業に本格的に取り組み、その財政的基盤を確保し従来の尻すぼみ的現象への不安を解消するため、昭和56年3月16日「基金の設置、管理及び処分に関する条例」、4月30日「編さん委員会条例」を公布した。

昭和56年9月26日、この条例に基づき第1回の編さん委員会が開催された。

梅林利一町長（当時）の文化行政の指針となるような町史を期待するという挨拶の後、委員の紹介、委嘱状の交付が行なわれ、委員長には後藤陽一先生、副委員長に松岡久人先生（当時、広島大学文学部長）が選出された。

委員の名簿は別表のとおりである。

準備委員会での検討内容が報告され、各委員が、宮島にふさわしい編さんのあり方について協議した。

宮島の歴史的性格を明らかにするためにはより広い範囲にわたり、各々の専門分野からの徹底的な調査を行なう必要があり、宮島にはそれが可能である。

また、現在の文化財行政との関連から、現代的な課題に応えるにはどうすればよいか。

そのためには、どのような編さん体制をとり、調査計画はいかにするか、等々の問題が話し合われた。

宮島町では、資料館活動において資料の整理・保存の充実をはかりその体制が整備されつつある。当然、町史編さんの過程で収集された資料も資料館の教育普及活動のなかで位置付けられなければならない。

地域住民との窓口となる教育委員会では、職員の同和研修を行ない、編さん室では、より効果的に総合的調査を実施する方法を検討する一方、町内外の資料調査を行なっている。こうして試行錯誤の連続であるが、第三の道への第一歩が踏み出された。

昭和54年7月18日　宮島町史編さん準備委員の委嘱（12名）
9月1日　第1回準備委員会　於宮島
昭和55年2月19日　第2回準備委員会　於広島
3月24日　第3回準備委員会　於役場
5月23日　編さん室開設（専門員1、職員1）
昭和56年2月18・19日　小松茂美（東京国立博物館美術課長）、河岡武春（日本常民文化研究所理事）、木下　忠（文化庁主任調査官）各氏に会う。於東京
2月24～28日　史料調査（役場資料）、広大大学院生4名
3月16日　基金の設置、管理及び処分に関する条例の公布
3月30日　第4回準備委員会　於宮島
4月10～13日　民俗調査　河岡武春氏
4月30日　編さん委員会条例の公布

5月19～20日　史料調査（廿日市住田氏）

5月25日　編さん委員委嘱承諾申請（広島大学ほか）　8月3日回答

6月　史料調査（林家）、事務局

8月4～15日　史料調査（呉市立中央図書館）、事務局

9月12～13日　河岡、木下各氏と打合わせ、於名古屋

9月26日　第1回町史編さん委員会　於広島

10月15～17日　地図調査（吉田家）、堤正信氏（広島女子大学講師、当時）

11月　広島県史収蔵フィルムの複写（吉田家）

11月24日　同和研修、一色征忠氏（廿日市町教育委員会）

12月8日　史料調査（大願寺）、後藤陽一氏

12月16～19日　地図調査（大願寺）、堤正信氏

12月20日　史料調査（大願寺）、後藤陽一氏外5名

民俗調査打合わせ、河岡武春氏

昭和57年2月20日　小委員会　於広島

2月8日～3月31日

史料調査（大願寺）、広大大学院生4名

3月16日　同和研修、岡部巧氏（廿日市町教育委員会）

3月26日　広島県史収蔵フィルムの複写（野坂家、光明院、宮忠）

3. 調査実施作業

編さん室では、町史編さんに必要な資料を調査収集整理保存しているが、その具体的な内容は次のとおりである。

○歴史史料

1. 史料所在調査（於編さん室及び各機関）

○各市町村、図書館、大学、文献等の史料目録の収集調査

○要調査史料の目録作成

2. 史料調査

① 所在の確認、調査方法の検討、閲覧願等の書類の作成

② 史料の閲覧（於所在地）

調査カードの記入

調査史料目録の作成

写真撮影・コピー

③ 史料調査整理（於編さん室）

写真焼付、製本

筆写

史料目録の作成・カード作成

フィルムの目録作成

収集史料の補修、保管

④　借用史料の調査（於編さん室）

借用書類の作成

○民俗資料

1. 聴きとり調査

○聴きとり内容・方法の検討

○聴きとり事項の確認

○聴きとり対象者の決定・調査期日の打合わせ

○聴きとりの実施……録音、録画

○結果の記録……ノート作成、カード化

○録音テープ、フィルムの目録作成

2. 民具調査

○既刊民具目録等の収集調査

○民具調査項目の作成、調査カード作成

○所有者の確認、調査期日等の打ち合わせ

○民具の計測、写真撮影、スケッチ

○使用法、作製法などの聴きとり

○調査カードの整理（写真添付）

○調査民具の目録化

○フィルムの目録化

○収集民具の補修、保管

○研究文献・文芸作品

○文献目録（既刊）の収集調査

○宮島関係分のリスト化

○所在地・版権の確認

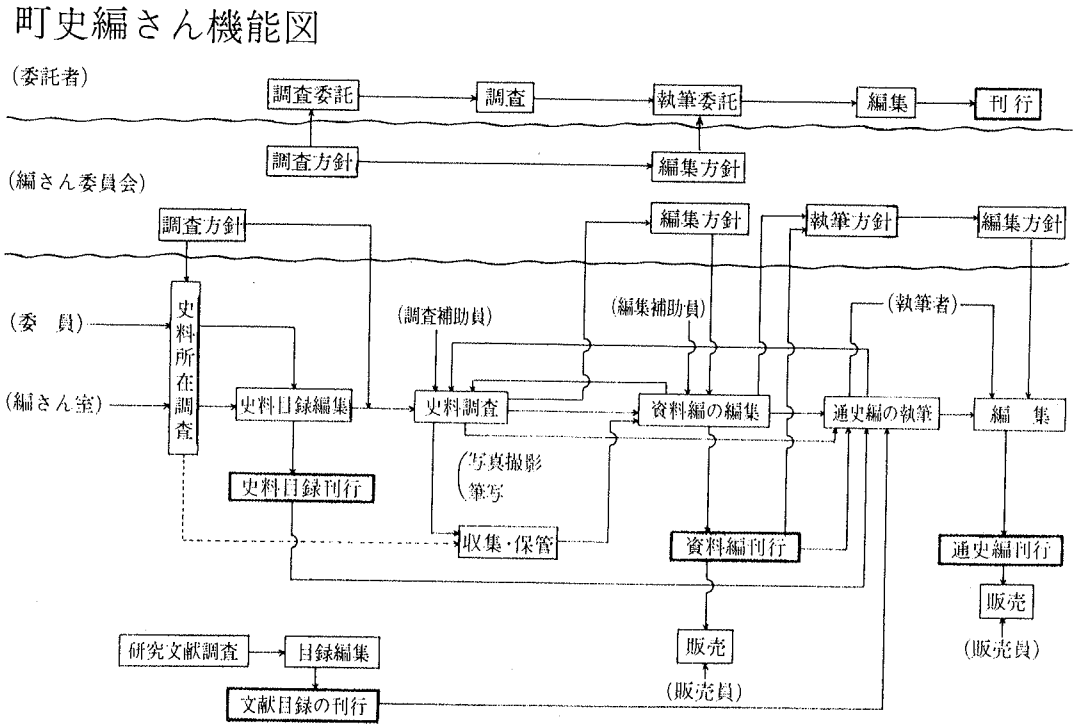
○写真撮影・コピー

○フィルム目録作成

○収集目録の作成

（刊行作業については省略する）

4. 町史編さん機能図



5. 条　　例

1. 宮島町史編さん基金の設置、管理及び処分に関する条例

○宮島町史編さん基金の設置、管理及び処分に関する条例

(昭和56年3月16日　条例第2号)

(設置目的)　第1条　宮島町史の原稿料及び印刷製本の経費に充てるため、宮島町史編さん基金(以下「基金」という。)を設置する。

(基金の額)　第2条　毎年度基金として積立てる額は、5,000万円以下とする。

(管　　理)　第3条　基金に属する現金は、金融機関への預金その他最も確実かつ有利な方法により保管しなければならない。

(運用益金の処理)　第4条　基金の運用から生じる収益は、宮島町一般会計歳入歳出予算に計上して、この基金に編入するものとする。

(繰替運用)　第5条　町長は、財務上必要があると認めるときは、確実な繰戻しの方法、期間及び利率を定めて、基金に属する現金を歳計現金に繰り替えて運用することができる。

(委　　任)　第6条　この条例に定めるものを除くほか、基金の管理に関し必要な事項は、町長が別に定める。

附　　則

この条例は、昭和56年４月１日から施行する。

2．宮島町史編さん委員会条例

○宮島町史編さん委員会条例

（昭和56年４月30日　条例第16号）

（設　　置）　**第１条**　地方自治法（昭和22年法律第67号）第138条の４第３項の規定に基づき、宮島町史編さん委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（所掌事務）　**第２条**　委員会は、次の各号に掲げる職務を行う。

(1)　町史編さんに関し、必要な調査及び審議をすること。

(2)　町史編さんに関し、必要事項を町長に建議又は意見を具申すること。

（組　　織）　**第３条**　委員会は、委員20人以内で組織する。

２　委員会は、次に掲げる者で構成する。

(1)　町議会議員

(2)　学識経験者

(3)　町　職　員

（専門委員会）　**第４条**　委員会は、特定の事項を審議するため、専門委員会を置くことができる。

２　専門委員会の委員には、前条第２項に規定する委員以外の者をもって充てることができる。

（委　　嘱）　**第５条**　第３条第２項及び前条第２項の委員は、町長が委嘱する。

（任　　期）　**第６条**　委員の任期は、２年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（委員長及び副委員長）　**第７条**　委員会に委員及び副委員長各１人を置く。

２　委員長及び副委員長は、委員の互選とし、その任期は、２年とする。ただし、再任を妨げない。

３　委員長は、会務を総理し、委員会を代表する。

４　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代行する。

（顧　　問）　**第８条**　委員会に顧問を置くことができる。

２　顧問は、委員会の議をへて町長が委嘱する。

（会　　議）　**第９条**　委員会の会議（以下「会議」という。）は、委員長が招集し議長となる。

２　会議は、委員の過半数の出席がなければ、開くことができない。

３　会議の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

（庶　　務）　**第10条**　委員会の庶務は、教育委員会事務局において行う。

（そ の 他）　**第11条**　この条例に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、教育委員会が定める。

付　　則

この条例は、公布の日から施行する。

6. 編さん委員会

○委員名簿

宮島町史編さん委員会委員（順不同）

（昭和57年3月31日現在）

後藤　陽一　広島修道大学教授
松岡　久人　広島大学教授
藤原　健蔵　広島大学教授
頼　祺　一　広島大学助教授
甲斐　英男　広島女子大学教授
定宗　一宏　広島県立美術館長
土井　作治　広島県史編さん室専門員
藤　井　昭　広島県教育委員会文化課主幹
岡田貞治郎　広島県文化財審議委員
野坂　元良　厳島神社宮司
岩村　益文　町史編さん準備委員会副委員長
藤岡　国男　資料館協議会副委員長
平山　真栄　大願寺住職
吉田　裕信　大聖院住職
吉　田　弘　宮島町商工会長
木村　義実　宮島町議会議長
山　田　勲　宮島町教育委員長
櫛田　典治　宮島町助役

編 集 後 記

○昭和56年度の年報より、編集を町史編さん室との共同で行います。年報としては第4号ですが、「宮島の歴史と民俗」としては第1号にあたります。内容等についてご意見をお寄せいただければ幸いです。

○昭和57年3月31日付で退任された空間一三前副館長が、10月、病のため物故されました。先生は、資料館の開設準備段階から、精力的に資料の収集・調査を進め、資料館の基礎がためと発展に尽力されました。退任後もその豊かな学識と経験をもって後進を導いてこられただけに、その急逝は、惜しみて余りあるものがあります。改めて、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

なお、新任の吉岡禎三副館長は、宮島中学校長をはじめ、佐伯郡内の沖美中学校長などを歴任。国語教育が専門です。今後とも、ご支援とご指導をお願い致します。

（高橋）

宮島の歴史と民俗 No.1

昭和58年3月20日　印刷
昭和58年3月30日　発行

編　集　宮島町立宮島歴史民俗資料館
　　宮島町史編さん室
発　行　宮島町立宮島歴史民俗資料館
印　刷　日本写真印刷株式会社